

# 祈月書院報

第41号

2024年10月25日発行

発行所 公益財団法人 祈月書院 発行代表者 熊野 嘉郎

巻頭文「いけばなのすすめ」

1～7面

書院のひろば

8～29面

2023年度秋季研修会報告

30～34面

## いけばなのすすめ

草月流 1 級師範

松本 紅女 秋田 紅奈

### 【いけばなとは】

いけばなの起源は一般に、仏教とともに伝来した仏前の供花（くげ）にあるとされています。「法華経（ほけきょう）」「華嚴経（けごんきょう）」など仏教の教えを説く経典の名称には「華（花）」の字が入っているものがあり、仏教と花の関係が深いとされています。また、神を招く依り代として常緑樹を立て、花を飾った日本古来の習俗から来たものとする説もあります。いずれにしても、いけばなが今日まで受け継がれ、発展してきた背景には、草木に寄せる日本独特の思いがあるのは確かなようです。

いけばなが、文献や資料のなかに明快な形で登場するのは室町時代（14世紀末～15世紀半ば）からです。この時代には、書院造り建築、庭園、連歌、能楽、茶の湯など、日本独特の文化が創り出されました。それをリードしたのは貴族に代わって文化の領域にまで台頭してきた武士たちです。またその担い手の多くは同朋衆（どうほうしゅう）と称された人々で、彼らは将軍家や有力大名に抱えられ、新しい芸術や技術を創造しました。そのなかには花を特技とする者もいて、やがて彼らによって、花器の中央に枝を高く立てる立花（たてばな）が作り出されました。また京都六角堂の僧で池坊の創始者・専慶のような名手も登場し、立花は武家社会や貴族社会へと浸透していきました。

16世紀末の安土桃山時代には、武家社会を中

心に流行した茶の湯が、千利休によって大成されましたが、その流れの中から茶花（ちゃばな）が生まれます。千利休は茶の湯の心得のなかで、「花は野にあるように」と説いていますが、茶花は装飾的な立花とは対照的な、簡潔で象徴性の高い花として、その後のいけばなにも大きな影響を与えます。

いけばなは、桃山から江戸初期にかけて大きな発展をとげます。池坊専栄、初代・二代専好によって様式的に完成した立花は、立華と名を改めながら時代の主役になった町人の間に広がっていきました。また印刷技術の発展にともなって出版された多くの花伝書も、この大衆化を促しました。やがて全盛期を過ぎた立華が創造性を失い、煩雑華美なものに堕していくのと並行して、18世紀半ばに生花（せいけ、またはしょうか）が登場します。生花はいけばなの三角形の骨格を「天地人」や「真行草」と呼んで理論化し、立華よりいけやすい形態をとったために、人々の間に広く迎え入れられました。そして多くの流派が誕生し、家元制度もできてきました。

19世紀末、明治初期の文明開化の時代には、いけばなは時代に合わないものとして衰退していきます。しかしゆき過ぎた欧化政策への反動として、政府がいけばなを良妻賢母の養成を目的に教育科目に取り入れたことによって復興の足がかりを得るとともに、それまで男性中心だ

った担い手が、女性に変わっていくことにもなりました。

また明治になって西洋の草花が栽培されるようになってくると、それをいけばなに採り入れた盛花（もりばな）が小原流初代家元の小原雲心によって創案され、盛花は新しいかたちのいけばなとして広く流行していきました。時代の大きな変化につれて、いけばなも、それを取り巻く環境も、急激に変わっていくのです。



題名：尽きない美しさ  
花材：葡萄の軸、かすみ草  
作：秋田紅奈

## 【外国人からみた日本のいけばな】

ここで少し視点を変えて、江戸時代と明治時代にいけばなと関わりのあった二名の外国人について紹介します。

### 1. シーボルトの日本研究

日本が鎖国状態にあった江戸時代、長崎でオランダとの交易が行われていた文政6年（1823年）、フィリップ・フランツ・フォン・シーボルト（1796年-1866年）が長崎へ到着します。シーボルトは様々な功績を残した人物ですが、彼がいけばなの国際化に影響を与えたということは、ほとんど知られていません。現在のドイツ、当時のバイエルン王国ヴェルツブルクの出身で、出島オランダ商館の医師兼自然調査官に任命されました。診療に従事するとともに、出島の植物園を整備拡大して、日本の植物を集め、オランダに送るようになりました。

文政7年（1824年）、シーボルトは長崎郊外に鳴滝塾（なるたきじゅく）を開きました。ここでは最新の学問を求めて多くの日本人が学ぶ

ようになりました。弟子たちは種々の課題が与えられ、オランダ語で論文を執筆して提出することが求められました。その中で高野長英が提出したのは、「花や枝を巧みに瓶に挿す法」というもので、シーボルトはいけばなに関する知識を獲得することになりました。

シーボルトは鳴滝にも植物園を作りました。特にアジサイを好み、日本人の妻「おたき」にちなんで「オタクサ」と名づけました。残念ながら別の学者によりすでに名がつけられていたため、無効となります。しかしこの縁でアジサイは現在、長崎市の花になっています。毎年開催される「長崎紫陽花祭り」の正式名称は「ながさき おたくさ まつり」と長崎の皆様に親しまれております。シーボルトはヨーロッパへいけばなにかかわる書物を持ち帰っておりますが、流派や様式へのこだわりはなかったようです。「日本」「日本植物誌」「日本動物誌」を書き上げ、花器の図も多く掲載されており、日本植物誌の扉絵には立花図が掲載されています。

### 2. コンドルのいけばな研究

もう一人、いけばなに魅せられた明治時代の外国人に英国ロンドン出身の建築家であるジョサイア・コンドル（1852年-1920年）があげられます。1877年に来日し、工部大学校（現・東京大学工学部）で教壇に立ちながら、東京を中心に建築の設計を次々と担当していきました。有名な鹿鳴館は現存しませんが、東京復活大聖堂（ニコライ堂、千代田区）や旧岩崎邸洋館（台東区）、旧古河邸（北区）などが残っています。建築と密接な関係にある庭園について研究した成果を、1890年に「Landscape Gardening in Japan」として刊行しました。これと平行して、室内装飾としてのいけばなにも注目し、1889年に論文「The Theory of Japanese Flower Arrangements」を発表しています。これは日本についての知見を深めることを目的とする日本アジア協会における発表をまとめたものです。コンドルは流派を問わず生け花の書物を集め、師を招いて研究を進めたといわれています。

さらに研究を深め、1891年には「The Flowers of Japan and the Art of Floral Arrangement」

を刊行しました。外国人によるはじめての本格的ないけばな研究書です。こちらは英国で反響がかなりあったらしく、その後増補改訂版として「The Floral Art of Japan」を創刊。その内容は、四季の花、歴史と理論、構成と花材の取り合わせ、花器、室内での飾り方、行事にふさわしい花、具体的な技法など、多岐にわたります。コンドルは、西洋のフローラル・アートが自然と離れた造形になっていることを批判し、自然の法則を意識する日本のいけばなを室内装飾として推奨しています。

### 【近・現代のいけばな】

こうして長い時間を経て継承されたいけばなは、現在は400を超える流派があるといわれるまでになりました。その中で3大流派といわれるのが池坊、小原流、草月流の3つの流派です。各流派はそれぞれ個性をもっており、大まかにその特徴を申し上げます。

まず一番歴史がある流派は池坊です。池坊のホームページでは、その特徴が次のように書かれています。

池坊では草木の命が作り出す姿を美しさの根源とし、そこには「和」があると考えます。つまり、草木の命が日々太陽や雨や風などに出会い、新たな姿へ変化することが「和」なのです。

池坊のいけばなには「立花（りっか）」「生花（しょうか）」「自由花（じゅうか）」の3つのスタイルがあります。立花は室町時代から続く最も古い様式、生花は江戸時代に成立したシンプルな様式、自由花は戦後に定着した型のない様式です。

いけばなを、茶道や香道などのように「道」としてとらえる場合、「華道」と呼びます。いけばなが成立した室町時代に池坊専慶が花をいけ、池坊専応がいけばな（華道）の理念を確立したように、池坊は「いけばなの根源」です。現在、いけばなには多くの流派がありますが、根源である池坊は、その名称に「流」「派」をつけず、「華道家元池坊」と称しています。

小原流は、小原 雲心（おはら うんしん）（1861年－1916年）により創流されました。幕末の1861年、今の島根県松江市の陶芸家の家に

生まれ、大阪で彫刻家として活躍するも、病弱のためいけばなの道へ転身。西洋文化の流入のなか彫刻家としての経験から西洋草花をいける水盤や鉢を考案し、これまでにない形式、盛花（平たい器＝水盤を用いて、材料を盛るように面的な広がり強調したいけばな）を創始しました。いけばなといえば、水盤に剣山というイメージが知られていますが、そのかたちを最初に生み出したのは、小原流です。

草月流は、「型」ととらわれることなく、いつでも、どこでも、だれにでも、そして、どのような素材を使ってもいけられるのが草月流です。いけ手の自由な思いを花に託して、自分らしく、のびやかに花をいけていきます。私たちは草月流でお稽古をしておりますので、草月について、もう少し詳しくお話させていただきます。

### 【草月流 海外との関わり】

初代家元・勅使河原蒼風（1900年－1979年）が形式主体のいけばなに疑問を持ち、「個性」を尊重した自由な表現を求めたことから草月のいけばなは始まりました。

江戸時代から続く華道家・勅使河原久次長男として東京に生まれ、幼少より父から厳しい稽古に明け暮れたそうですが、型通りにいけるそれまでのいけばなに疑問を持ち、父と決裂。1927年に家を出て独立し、草月流を創流しました。従来のいけばなにない革新的で独創的ないけばなを追求します。古来のいけばな界からの風当たりが強まる中、独自のセンスは話題を呼び海外で個展を開くようになります。蒼風の感性はいけばなに留まらず、絵画・彫刻・書・オブジェ等広がりを見せます。フランス政府よりレジオン・ドヌール勲章を授かる等、国際的に活躍しました。

蒼風が生きた時代は太平洋戦争をはさんだ激動の時代です。歴史の浅い草月流が現在では三大流派にまで発展し、世界に「IKEBANA」をどのように広めたのか。その頃のエピソードが早坂暁氏著の華日記という本に載っていますので一部を紹介いたします。

終戦後1945（昭和20年）年10月21日群馬県清

里村へ疎開していた勅使河原蒼風のもとヘジーブが止まり、アメリカ軍将校が降りてきました。アメリカ軍将校の夫人たちに、いけばなを教えてほしいというのです。そこにはマッカーサー司令官の夫人も含まれていました。戦前からいけばなの家元としては、最も多くの外国人生徒がおり、当時の外務大臣内田康哉の夫人と令嬢は蒼風の門下生でもありました。内田夫人は各国大公使の夫人や令嬢を展覧会やお稽古の見学へ案内し蒼風を紹介。アメリカのグルー駐日大使夫人も熱心に教室に通われた一人でした。おそらくそこから得た情報に違いないと蒼風は思います。しかし、つい二か月前まで死闘してきた相手であり、日本は戦争に負け、街という街が焼き尽くされた日本で生け花は死んでしまったと思っていた蒼風は、すぐに答えは出せませんでした。

その日の夜、もう一人来訪者があり「勅使河原蒼風と小原豊雲の二人展」を主婦の友社で開催する話が飛び込んできました。蒼風は神の声を聞いた思いだったそうです。焼け野原となった東京へ戻り、あまりの惨状に立ちつくしましたが、豊雲とともに会場準備にいそしみます。誰も来ないと思っていた、戦後初のいけ花展には何年振りかの再開と相互の無事を喜びあう人々が集い、遠方から駆け付けた門下生も多くいて、いけばなの存在を明らかにします。そして展覧会に集まったのは日本人だけではなく、米軍の高級将校とその夫人、婦人将校たちもいて、数々の質問を蒼風に投げかけます。

蒼風は英語が話せなかったため、門弟である小川青虹（おがわせいこう）が通訳を務めました。彼女は本名小川愛といい、新渡戸稲造の秘書をしていた女性です。新渡戸稲造は第一高等学校校長や東京女子大学長を経て国際連合の事務局次長になった日本きっての国際人でありました。小川青虹にいけばなを勧めたのも新渡戸であり、草月流の蒼風を紹介したのも新渡戸でした。いけばなは優れた民間外交になると考えていたようです。

1916年9月に竣工した煉瓦造2階建ての洋館が一部を残し今も東京駅近く和田倉濠に面した西側および南側に残っています。洪沢栄一が創設

した東京銀行協会のための集会施設、東京銀行集会所です。煉瓦壁に白色系の石を配する軽快なデザインに特徴があり、19世紀末のイギリスで流行した建築様式の建物でした。ここは1945年9月にGHQによって接收され、「バンカーズ・クラブ」の名で米軍将校クラブとして使われていました。このバンカーズ・クラブから蒼風のいけばな教室をぜひ開いてほしいという申し出が小川青虹のもとにきました。当初忙しさと、きつと暇つぶしに教室を開こうと考えられていると思いお断りしようと思っていた蒼風ですが、バンカーズ・クラブ側と小川青虹からの熱意に根負けして教室を開きました。当初は将校夫人に限って始めましたが、希望者が殺到しました。鋭い質問も飛び交って蒼風自身も本気になって教え始めたといわれています。

この教室で学んだ生徒が全世界へ散って、いけばなインターナショナルという世界的な組織となって結実することになります。いけばなインターナショナルは、米国人のエレン・ゴードン・アレンが創立しました。アレンはGHQ（連合国最高司令官総司令部）に勤務していた准将の夫人です。いけばなのすばらしさと日本文化の紹介を通じ、相互理解と友好の輪を世界に広げる趣旨として、様々な流派の会員が、「花を通じた友好」を大切にして、国籍や人種を超えて活動しております。

花展も日本から世界へと広がり、さらに実演（デモンストレーション）へと変化していきました。1952年全米に放送されたデモンストレーションを、ニューヨークタイムズ紙は写真を載せて「日本から飛来の簡素（エコノミー）な生け花、葉の中に点在する花の魅惑」と紹介されました。さらに3年後のパリのバガテル宮殿での個展についてタイムズ紙は蒼風を「花のピカソ」と表現され、ピカソが好きだった蒼風はさぞ喜んだことだと茜家元は申ししておりました。

話を草月流に戻しますが、蒼風の没後、1979年に長女霞家元が第二代家元に就任しました。ミニアチュールという極小のいけばなや、枯れものの、着色素材を駆使した軽快で豪華な作品で独自の作風を確立するも、1980年47歳の若さで世を去りました。

三代目は初代家元の長男宏家元が継承しました。彼は東京芸術大学で油絵を学び、在学中より岡本太郎や安部公房による前衛芸術グループ「世紀」に参加。その後、表現の場を映画に移し、映画「砂の女」(1964年)ではカンヌ映画祭審査員特別賞を受賞しました。一般的にはいけばなの家元よりも映画監督としての印象が強い方なのかなという気がします。陶芸や書にも才能を発揮し、ジャンルにとらわれない創作活動を晩年まで展開しました。

現在は宏家元の次女茜家元が四代目として活躍されております。いけばなの家元といっても、お花の事のほかに手広く活動されており、芸術家という人々は多才なのだなと思います。

### 【千利休】

宏家元の映画監督作品に「利休」という映画があります。千利休はいけばなの世界でもよく名を耳にする人物です。

茶の湯にとって、お花は欠かせないものです。有名な話の一つに、豊臣秀吉と朝顔の話があります。「利休の家の庭で朝顔が実に見事に咲いているという噂を聞いた秀吉が、その朝顔を見てみたいと利休に所望します。では、と利休の



題名：初夏の花材で爽やかに  
花材：ギガンジウム、オクラレルカ、谷渡り  
作：松本紅女

屋敷で朝顔の茶会が催されることになります。秀吉が招かれて行ってみると、庭の朝顔は一つ残らず摘み取られており、茶室にただ一輪の朝顔がつけられていたというのです。」(「いけばな」勅使河原茜著より)

これに対し秀吉は利休を褒め、利休の名声は上がったといわれています。派手好みといわれている秀吉がたった一輪の朝顔を見てどう感じたのか実際に聞いてみたいところです。私たちには朝に咲いてすぐにしぼんでしまう、儂い朝顔をいけようという発想がありませんでしたが、相手を思うもてなしの心とひと時の美しさにかけた茶人としての千利休の思いがよく伝わるエピソードだと思います。

### 【日本の美学】

日本は四季の彩りが豊かな半面、大地が猛威を振るう世界でも稀に見る災害の多い国です。かなわない自然の力に対して生命の尊さを実感し、あらゆるものに対して八百万の神がいるともいわれております。また自然と共存してきた私たちの祖先は自然に対して「美」を見出してきました。桜の花が美しいと感じるのは、桜があつという間に散ってしまうからです。刹那的な美しさと滅びていく儂さを良しとするのは日本人の美意識といえるでしょう。

そして茶の湯の茶花然り、日本の美しさには、引き算の美学があるといわれます。余白や空間を作り出すことにより、見えないものの美しさ、風情や趣を敏感に感じとってきました。自然の作り出す景色を感覚的にとらえて様々な方法で表現する俳句は、四季の美しさをわずか17文字で表現し、景色や音や匂いまで読み手に感じさせることができます。

### 「花はいけたら人になる」

草月流初代家元蒼風の言葉です。花はいけたらいた人自身が、そこに映し出されるそうです。花に向き合うということは、花の美しさも怖さも、強さも儂さも、すべてひっくり返して受け入れて表現することであります。それは同時に、自分の至らなさや弱さを受け止め、自分と向き合うことでもあります。自然を敬いながら別の形で表現する美学も発展したものの一つで

はないかと思います。

私（秋田）がはじめていけばなに出会ったとき、枝だけの美しいフォルムをみて、こんな表現があるのかと感動したことを今でも覚えています。この感動を誰かに伝えたいとの思いから、草月流の門をたたきました。

しかし東日本大震災の後、放射線量を気にして外出する人々。自然への恐れや悲しみを前にして、花に対して人々は感動するのかと心配になりました。

そして2020年、新型コロナウイルスが世界を変えました。いつも人が溢れ、人との距離も近かったいけばなのお教室も、緊急事態宣言のため閉鎖されました。解除後、久々のお稽古で手にした花材は、箱に入った緩衝材のクッションペーパーに包まれた胡蝶蘭でした。基本的にお稽古用の花材は予算をお伝えし、花材が届くため手にするまで花材はわかりません。約50年お教室を開いていた先生でさえ、胡蝶蘭のような高価な花材がお稽古用として届くことに驚きを隠せませんでした。商業施設やホテル等に納めるために大事に育てられた花たちは出る幕がなく、お稽古の練習花となり、私たちの手元に届いたのです。農家さんの大変さが伝わりました。

また、人との距離を保とうと、早朝、犬の散歩に出かけたときに見た桜は、人の移動がないため車が減ったことにより空気が澄んでいるためか、また私の心が癒しを求めているのか、いつもより美しく咲いていると感じました。見えないコロナという敵を恐れている人間とは異なり、いつもと変わらずゆったりとした空気をまわっていました。

家から一步出れば、都会でも、植えられて育った美しい木々が私たちにささやきかけてくれます。己の無力さを感じながらも、自然を神聖なものと捉え、時に敬い、恐れながら、調和を大切にしていきたい、と改めて感じた瞬間でした。

#### 【おわりに】

24時間、家にいながら1（ワン）クリックで何でも手に入る便利な社会になりましたが、同時に現代人はとても疲れています。生活や仕事

からストレスを受けたり、時間を見つけてはスマートフォンを触ってみたりと、休む暇がありません。そんなとき、気持ちを切り替えてお花を活けてみると案外良いアイデアが浮かんだりするものです。

何事も見ると聞くのでは大違いと申しますから、長い人生一度いけばなを試してみたいかがでしょうか。

参考：

草月流 (<https://www.sogetsu.or.jp/>)

池坊 (<https://www.ikenobo.jp/>)

小原流 (<https://www.ohararyu.or.jp/>)

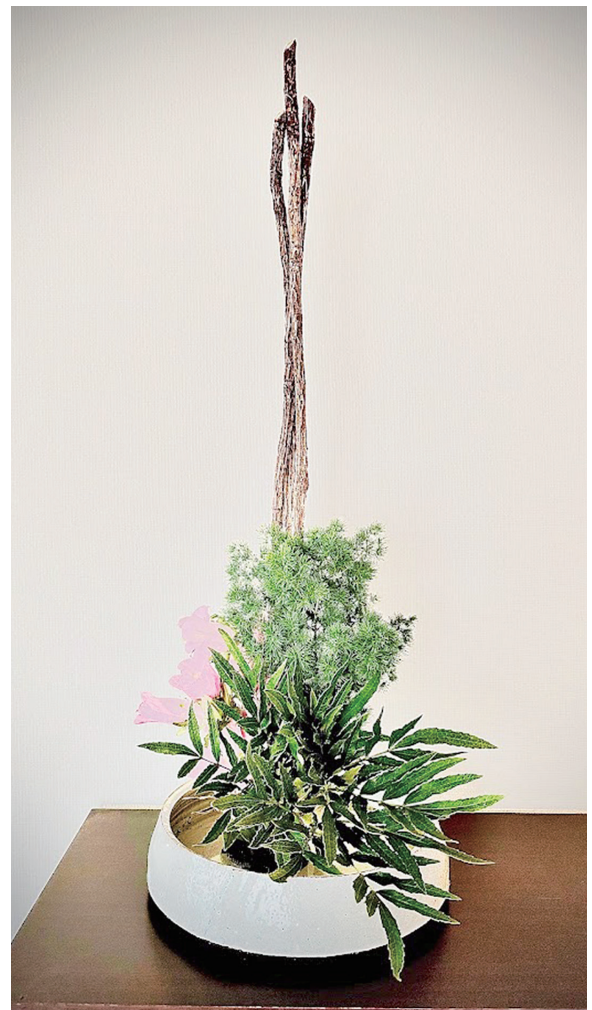
いけばな（勅使河原茜、角川書店、2011年刊）

華日記（早坂暁、新潮社、1989年刊）

1日5分いけばなの歴史（細川武稔、淡交社、2022年刊）

IKEBANA INTERNATIONAL

(<https://ikebanahq.org/>)



## 付記

2024年春の祈月書院研修会は6月9日、東京神田の学士会館にて奨学生17名を含む33名の参加を得て行われた。オンライン配信を利用したりリモート参加者も9名を数えた。

テーマ「私といけばな」は講師にお招きした草月流1級師範 松本紅女・秋田紅奈両先生のご発案で、講演といけばな実演の後に会場参加者にはプチいけばな体験をしてもらうという楽しみな企画となった。

硬い印象が強い祈月書院研修会に、書院関係者のご縁で紹介された今回の企画に全く逡巡が無かった訳ではない。ただ日本人なら身近に目にする機会が多い「いけばな」についても、実のところ知っていることは限られ、まして手に触れる体験をした人は限定的と思われる中、こうした機会を得られること自体が貴重に思えた。若い方の中には「異文化を体験したい」という理由で海外へ出ることも多く、それ自体はより広い視野で社会の問題を考察し、翻ってより深く自分を見つめなおす契機にもなることから推奨したいことではあるが、彼の地の人と交流するうちに異文化の前に自文化のことすら知らないという問題に直面することもある。

一言で文化と言っても、例えば日本ではいけばなの他に茶道、書道、絵画、能や歌舞伎、武術等々種類も多く、またそれぞれの内面の精神性までを理解することは難しい。ましてやそれらを極めて、自らの心の豊かさに繋げていくには相当の努力が必要なことは明白である。しかし何事も第一歩を踏み出すことから始まるので、今回の体験もいけばなに限らず、若い人に何らかのきっかけになればと考えた。

当日会場では「作品が完成したと思う時はどんな時か」「目の前の花材から作品の最終形をどのようにして想起するのか」など質問も活発に飛び交い、先生ご自身の経験を踏まえ丁寧にお答え頂いた。参加者の感想も「実際にやってみて興味が湧いた」などの前向きなものが多く、所期の目的は果たせたように思う。

ただ両先生による基本形・応用形の実演や、プチ体験指導の為に多くの時間を費やした結果、いけばなに対する思いやいけばなの歴史等の講義に十分な時間が取れ無かったように思われ、当書院報へのご寄稿をお願いした所、ご快諾頂き前掲の玉稿をお届けいただいた。松本・秋田両先生には研修会当日のご準備も含めて、改めて深く感謝申し上げる次第である。

(文責：熊野嘉郎)



## 書院のひろば

### 医薬品事情について独り言

祈月書院諮問委員  
医薬品医療機器レギュラトリーサイエンス財団  
宇津 忍(松江南1982年卒)

先の祈月書院報のコロナ特集で、コロナ禍で表面化した医薬品開発の課題について述べた。そのポイントは、我が国では医薬品開発のキーとなる臨床データ／エビデンス取得に対する意識がアカデミアも含めて国際的に見て低いこと、今後は臨床データを取得するため日本主導も含めた国際的なネットワークの形成、平時からの関連データの取得が必要という点であった。今回、私は今年3月で厚生労働省を退職したこともあり、我々がお世話になる医療において、医薬品関連で起こっている課題についてつぶやいてみたい。

#### 「再生医療等製品」の承認取り消し

「再生医療等製品」とは、ヒトの細胞を取り出し、加工増殖して本人あるいは他人の体に戻し治療するという製品である。我が国はiPS細胞を開発した山中伸弥先生がノーベル賞を受賞するなど、再生医療に関する基礎研究で世界をリードしている。しかしながら実医療に使う製品開発は進まず、15年近く前になるが、当時開発が盛んであった韓国、着実に進んでいた米国を参考に、関連規制の簡素化・柔軟化が求められた。紆余曲折があったが、「再生医療等製品」に対し、医薬品承認で通常必要とされる有効性の「確認」ではなく、米国の制度と同様に「推

定」で承認し、市販後に追加で有効性を確認する試験を実施する「条件付き期限付き承認制度」が創設された。この制度で既に下記の4品目が承認されている。

そのうちハートシートとコラテジェン筋注用4mgが、いずれも承認後の臨床データで有効性を示すことができず、前者は審議会での審議を経て承認取り消しとなり、後者は承認を辞退し、相次いで市場から撤退した。なお他のステミラック注、デリタクト注は市販後のデータを収集している段階であり、結論は出ていない。承認され医療に使われているものが、その後に得られた新たなデータにより承認を取り消されることは制度上あり得ることだが、その間に治療された患者への倫理的側面、コスト面も考慮しなければならないことから、実際にはまれで2品目相次ぐことは異例である。医療界からもこの制度についての疑問が出される状況となっている。

世界的に著名な科学雑誌であるNatureは、1番目のハートシートが承認された2015年、2番目のステミラック注が承認された2019年にそのEditorials（論説）で、それらの承認に対しそれぞれ“Japan has introduced an unproven system to make patients pay for clinical trials.”（日本は、臨床試験の費用を患者に支

再生医療等製品として承認された品目

| ハートシート               | ステミラック注                | コラテジェン筋注用4mg           | デリタクト注                 |
|----------------------|------------------------|------------------------|------------------------|
| 虚血性心疾患による重症心不全の治療    | 脊髄損傷に伴う神経症候及び機能障害の改善   | 慢性動脈閉塞症における潰瘍の改善       | 悪性神経膠腫                 |
| 2015/9承認<br>国内臨床試験7例 | 2018/12承認<br>国内臨床試験13例 | 2019/3承認<br>国内臨床試験209例 | 2021/06承認<br>国内臨床試験32例 |

払わせる実証されていない制度を導入した)、“Japan should put the brakes on stem-cell sales.”(日本は幹細胞の販売にブレーキをかけるべきだ)とする投稿を掲載した。先に米国の制度と同様の制度を導入したと述べた。ではなぜ、世界的な科学雑誌で批判されるのか？これは、ベースとなる臨床データ／エビデンスに対する日本の意識が低いことが原因である。米国では有効性の「確認」とは、2つの大規模臨床試験がともに成功することが一般的に求められるが、我が国では実現可能性も考慮しそこまでは求めている。一言でいえば、米国から見ると我が国の「確認」は「推定」レベルであり、我が国の「推定」は、米国では「推定」にもあらず、日本の承認はエビデンスに基づかないとみなされているということである。

今年の再生医療等製品2製品の相次ぐ市場からの撤退は、コロナ禍で明らかになった臨床データ取得の重要性を、再度認識させられる出来事である。かつて再生医療等製品の先進国といわれた韓国では10年以上前にエビデンスが乏しい再生医療に対する批判が起こり、その後、再生医療等製品開発の話題は全くなっている。基礎研究に比べ臨床試験データ取得はコストも膨大となるが、有用な治療法を開発していくには、我が国において着実なデータ取得を行っていかねばならない。

話は変わるが、米国も成功ばかりではない。世界が注目したアルツハイマー病の治療薬アデュカヌマブの審査では、大規模臨床試験が2つ実施され、主要評価項目で1つが成功、1つが失敗となる結果で、規制当局であるアメリカ食品医薬品局(Food and Drug Administration: FDA)が外部専門家の意見を聴く諮問委員会では、十分なエビデンスはなく承認は適当でないという評決が得られた。しかしながらFDAは、主要評価項目ではなく代替指標で評価する、加速承認というスキームを活用し承認した。これに対し、諮問委員会の複数委員が抗議の辞任をするという事態となった。加速承認は、主要評価項目との関連性が十分に確認された代替指標を用いて主要評価項目の結果が得られる前の早期に承認するものである。したがって、すでに主要評価項目の結果が出ている段階でFDA

が加速承認するということは、異例であり議論を生じることとは無理もない。

薬の承認・使用の可否は、個人の人生観や医療コストもかわる複雑な世界であり、情報開示、説明責任により対応していかざるを得ないものとする。説明責任を果たすにはその根拠となるエビデンスを有していることが必要であることは言うまでもない。

### 新薬開発の日本離れ(ドラッグロス)

近年、製薬企業、特に米国ベンチャー企業が日本で医薬品開発自体をせず、結果として新薬が日本で使えないというドラッグロスが顕在化し、その数も増えてきている。この背景として、近年の医薬品開発はバイオベンチャーが担うことが多く、これらの企業は収益性が見込める米国での早期承認取得を目指すこと、十分な資金やリソースを確保できず、魅力が低い日本市場に投入しない状況があげられる。

政府もこれまで創薬力の強化に向けて数々の提言・施策を行ってきた。直近では「創薬力の向上により国民に最新の医薬品を迅速に届けるための構想会議」が本年5月に中間とりまとめを公表した。主要なポイントの中には、先に述べた国際的な臨床試験ネットワーク構築も含めた国際共同治験の推進、外資系企業・外国資金の呼び込みなどが含まれている。一方で、この中間報告の発表に合わせて総理も出席する「創薬エコシステムサミット」が開催されたが、参加した製薬企業のトップからは、国民皆保険制度下での薬の公定価格である「薬価」を魅力的なものにするよう注文が続出した。

国民皆保険制度については、製薬企業にとっては開発した医薬品が高い予見性をもって広く使用されるというメリットがある一方で、保険財政を維持するため社会保障費の伸びが抑制されているため、企業が高い薬価を得て収益の向上を図ることが難しい状況が続いている。さらにバブル崩壊後の日本経済の低迷によりこの傾向が顕著となり、欧米に比べ日本市場の魅力の低下につながっている。IQVIA(注：世界最大規模のヘルスケアソリューションカンパニー)のレポートでは、2024-2028の医薬品市場の伸び率は、世界全体で6-9%、日本-2-1%、北米

6.9%、西ヨーロッパ4.7%、アジア・パシフィック5.8%、中国2.5%となっており、巨大市場の欧米で鈍化はみられるものの引き続き成長が見込まれる一方で、日本はマイナスも含めた低成長が予想されている。

国としても、予見性の高い規制、薬価であることを直接米国企業に周知すること、画期的な新薬開発に対する優遇措置などの薬価上の対応を行っている。しかしながら、上記の分析でも示されている通り、他国・地域に比べ市場の成長が期待できない状況で、企業が楽観的な見通しを立てることは難しいだろう。

### 医薬品不足

この数年で、必要な医薬品が手に入らないといったニュースを見たことがある方も多いのではないと思う。調査によれば医薬品全体の約3割に上る医薬品が供給停止あるいは限定出荷という状況になっているとされている。これらの問題は、新薬として開発した先発品よりは、価格の安い後発品（ジェネリック）医薬品で顕著となっている。この背景は、承認を得た製造方法と異なる製法で製造されていた、検査結果などが捏造されていたといった理由から、企業が行政処分を受けたり、新しい製造方法に変更する手続きに時間を要していたりすることで、生産ができないことによる。

日本では、多くの後発品メーカーがあり、先発品の占有期間終了後、多くの企業が参入することでシェアの奪い合いとなり、結果として非効率的な少量・多品目生産となる。また、薬価も低く抑えられるため、古い薬剤となると利益を上げることができない品目も出てくる状況となる。そのような状況下、製造現場ではコストや時間の削減のため製造方法の変更、試験の省略といった方向に流れたともいわれている。厚生労働省も「後発医薬品の安定供給等の実現に向けた産業構造の在り方に関する検討会」などで改善策の検討を行い、非効率的な少量・多品目生産の解消に向け、1品目5社程度に集約するという構想を打ち出し、反響を呼んでいる。この構想についても、災害など様々なりリスクがある中で、医薬品という生命関連品目の安定供給が維持できるのかという指摘が出されているの

も事実である。同時に、投資を困難にさせることにつながる薬価の下落の問題も指摘しているが、社会保障費の増加抑制により、薬価全体としては引き下げの圧力は強い状況にある。効率性だけでなく、人員確保も含め必要なコストをかけられる環境整備も必要である。

一方で、一部の例外を除き供給停止となった医薬品の品質は問題なく、流通しているものは回収されず使用されている。この観点からは、法令順守は当然としても、そもそも規制・制度が必要十分なもののか、製造実態と合致しているかという点についても常に見ていかなければならないことも事実である。

### おわりに

日本の医薬品をめぐる課題から、国際基準での臨床エビデンス取得、薬価など必要なコストを確保していくことが必要であることを述べた。また同時に、規制の妥当性を確認する必要性にも触れた。これは様々なコスト上昇に伴う社会保障費の増大、国民負担の増加にもつながる要素を持つ、大変難しい課題である。

日本全体を見ると、自動車の型式認定に代表される様々な不正、医師・教員の過重労働、介護職などに代表される低い給与水準と確保難などが指摘されている。東南アジアからの介護人材・派遣労働者確保では、給与水準の低さから日本以外の国を志向する方が増えているともいわれる。各分野により特徴的な背景があるとは思いますが、医薬品だけにとどまらず、日本全体で必要なコスト、人的資源確保といったロジスティクスへの理解が進まないことが、現場に過剰な負担を強いていることにもつながる要因と考えてならない。

日本が世界の中で生きていく以上、国際的視点の中で評価されるということに加え、必要なコストはあることを改めて認識すべきであろう。そのうえで、消費者にとっては安価なサービスは好ましいが、安い日本を自認しそれなりの日本で良しとするか、時には厳しい路線をとり発展にチャレンジしていくか、選択が必要な時期に来ていると考える。

少子高齢化に伴い、経済規模の縮小、労働力不足、社会保障制度・財政の持続可能性など、多くの問題が指摘されていることは周知のとおりです。医療の点からは、2025年、2040年は画期とされ、2025年問題、2040年問題と言われています。2025年は1947年から1949年の間に生まれた約800万人の団塊の世代がすべて75歳以上の後期高齢者となる年で、人口の約30%が65歳以上、15%超が後期高齢者となり、医療・介護システムに大きな負荷がかかるとされています。その後も65歳以上の高齢者人口、75歳以上の後期高齢者人口は増加が続き、2040年頃にピークを迎え、65歳以上が約35%、75歳以上が約20%に達すると予測されます。私は島根大学医学部附属病院血液内科に臨床医として勤務していますので、地方の医療現場からの視点で感じることをいくつか述べてみます。

医療の分野の主な課題としては、高齢者増加による医療・介護の需要増大、それに対応する医療・介護従事者の不足、社会保障費の増大があげられます。医療・介護従事者を増やすため、定員を増やしたり待遇改善が行われていますが、未だ十分ではありません。例えば、2025年に必要となる介護職員数が243万人と試算されているのに対し、2020年時点の実績で31万人が不足しています。看護職員数も、2025年の需要推計が188万人から202万人であるのに対し、供給数は180万人と予想されています。

医師数は、1970年代に一県一医大が整備されるなど増加が図られた後、1982年からは医師数過剰とならないように抑制がなされました。医療従事者の不足は予想されていたので、2008年から医師増員、医師養成数増加政策へ転換されました。医学部入学定員が2008年度の7,793人から2022年度の9,374人に1,581人増え、医師数は2010年から2020年にかけて44,574人増加して2020年に339,623人となっています。

### 医師の地理的な偏在について

絶対数だけでなく、地理的偏在、診療科の偏在も重要です。地理的な偏在としては、容易に想像される通り都市部に医師が多く、地方には少ないという構図になっています。医師偏在指標という、医師の年齢や地域の人口・年齢構成等を考慮して医師数の多寡を評価した指標があります。都道府県別では医師数が多い方から順に東京都、京都府、福岡県となっており、下位には北関東、東北の県が並びます。島根県は21位とまずまずですが、県内の東西格差が大きいという特徴があります。二次医療圏（概ね平成の合併後の市1～2個分に相当する地域医療計画単位、島根県では松江、出雲、雲南、隠岐、大田、浜田、益田の7つ）別でみた医師偏在指標では、全国1位が東京区中央部、2位が東京区西部で、島根県立中央病院と島根大学医学部附属病院がある出雲市は全国で7位です。一方で、大田、雲南、隠岐は全国で下位33%に入っています。このため、出雲の医師が非常勤として県西部の医療の一部を担っており、高度医療が必要な場合には患者が県西部から出雲の医療機関を受診するという状況です。こうなると、出雲に医師数が多くても余裕はなく、東西に長く交通の便が悪い点、山間部から平野部へのアクセスが悪い点等が問題となってきます。島根県東部の常勤医を減らして県西部の常勤医を増やせばよいではないかとも思いますが、難しそうです。県立中央病院や大学病院は高次医療機関として、緊急疾患や集学的治療を要する重症患者に常時対応できるよう体制を維持する必要があります、この面からはギリギリです。

地域偏在悪化の契機として、しばしば2004年に導入された新医師臨床研修制度が指摘されます。それまでは医師免許取得後に大学の医局に入局し、医局人事によって各年代の医師が地域の医療機関に派遣されていました。良くも悪くも問答無用で派遣され、地域の医療を担っていました。現在の臨床研修制度では、研修医と病

院の間のマッチング制度によって決まる病院で2年間研修を行います。初期研修終了後に大学医局に入局することもあります。入局せずに市中病院で経験を積む医師が増えました。初期研修もその後も、都市部や地域の中核病院が人気です。その結果、都市部や地域の中核病院への医師の集中がすすみ、地域的な偏在化が進んだというわけです。地域枠入試はありますが、多くの場合は卒後x年間の内のy年間は県西部の医療機関で勤務するというような条件になっており、若いときに数年間県西部の医療機関で勤務するだけということが多く、短期的な応急手当となっています。ただし、それでも貴重な人員であるというのが実情です。また、若い医師は指導医が少ない環境、高度医療が行いにくい環境で経験を積むという面で不安を抱いており、自発的に県西部で勤務したいという人は少数です。

高次医療機関が県東部に集中していることも医療資源の偏在の要因になっているとも考えられ、病院の所在地を変えることも考慮すべきかもしれません。しかし、現状で西部の医療機関に高次機能を移すことは設備、医師・医師以外の人的資源の点から困難ですし、病院を建替える際に移転するのも一筋縄ではいかないでしょう。また、そもそもの医療需要自体は県東部に多く、今後はより高齢化が進行している県西部の方がより早期に医療需要が減少すると考えられるため、長期的には県西部に高次医療機関を作ることは非合理的かもしれません。現状では、医療資源調整の強化、交通アクセス改善、緊急時のドクターヘリの充実等で対応することが現実的かもしれません。

### 診療科の偏在について

ここ10年で医師数が増加した診療科は主に精神科、皮膚科、麻酔科、腎臓内科、糖尿病内科、眼科、整形外科、美容外科などです。外科は減少し、産科は横ばいです。勤務時間が長い、緊急対応や呼び出しが多い診療科、訴訟リスクが高いとされる診療科は以前にもまして敬遠されている印象で、現在も医師が不足しており、今後ますます不足すると思われます。診療科によって必要な医療資源の分布は異なります。急性

腹症（緊急手術を要する腹痛で、主として腹部・骨盤部疾患）や、心筋梗塞や脳卒中、緊急分娩などは、分・時間単位で予後が変わるため、これらに対応する部門は地理的により細かな医療資源の配置が望ましく、その分多くの医療従事者が必要です。しかし実際には、西部の医療機関で緊急疾患に対応できず出雲へ搬送されることはままあります。近隣の医療機関ですぐに対応できない場合には、ドクターヘリ等によって搬送時間を短縮することで、人的資源の不足を補っているわけです。更に当該診療科の医師が減ると、県西部では急性期医療や周産期医療が全く成り立たなくなってしまう恐れがあります。

専門科は初期研修後に選択します。医療機関が専門診療科ごとの後期研修プログラムを用意しており、そこに医師が申し込みますが、概ね自由に選択できます。近年シーリング制度が導入され、一部の都道府県の一部の診療科ではプログラムの人数が制限されています。しかし、極端な偏りが助長されないようにする程度で、現行の偏りを補正するほどの大きな制限にはなっていません。

医療従事者個人が偏在や需要を考慮して専門科、勤務場所を選択することによって偏在を解決することは、現実的ではありません。また、医局、医療機関ごとの対応で地理的偏在の調整、診療科の調整を行うことも難しい状況です。医療機関が医師確保のために高額の給与を設定することもあります。人件費高騰を来しますし、長続きしない例が多いようです。アメリカでは、試験の成績によって診療科を選択できる制度があります。成績で決めるのはどうかという気もしますが、社会インフラとしての医療資源の最適化という点からは、強制力のある資源配分が必要なのではないかと思います。

### 医療費について

医療費の増加には、高齢化に伴う医療需要・疾病構造の変化、医療技術の進歩による高額な検査・治療の増加、受診や検査の回数、入院数・在院日数などが影響しています。高額な新規治療の例としては、2014年に悪性黒色腫、2015年に肺癌に対して承認されたニボルマブ

や、2019年に一部の悪性リンパ腫、白血病に対して承認されたCAR-T療法（1回3000万円以上、1人1回のみ）などがあります。これらを筆頭に、高額な新規治療がどんどん増えています。また、低侵襲の治療が増え、多くの分野で以前は治療対象とならなかった（治療できなかった）高齢者に対する高度な治療も増えています。薬剤の売上高は、以前は降圧薬や脂質異常症治療薬など単価は安く（1錠数十円単位）使用数が多い生活習慣病治療薬が上位を占めていましたが、近年は単価が高い薬剤が上位を占めるようになってきています。

医療費削減のため、診療報酬改定、出来高制から包括評価制度への移行、定期的な薬価見直し、後発医薬品使用の推進、予防医療推進、入院期間短縮、そのための地域包括ケアシステム整備等が行われています。

例えば、病院に支払われる診療報酬は、以前は行った検査や治療に対して支払われる出来高制でした。包括評価制度では主傷病等により病院に支払われる診療報酬が決まりますので、検査や投薬を増やすほど病院の利益は減ります。また、入院期間が長くなるほど1日当たりの診療報酬が減るように設計されており、病院にとって入院期間短縮のインセンティブとなっています。2003年から導入され、現在は一般病床の約85%が包括評価制度の対象になっています。

薬剤の高額化に伴い、費用対効果を考慮する研究が増えてきています。治療効果の評価指標としては、従来は一定期間後に患者が生存している割合を評価する生存率や、一定の効果がみられる患者割合を評価する奏効率等が主でした。最近ではquality of lifeも加味した指標（質調整生存年等）や、これを増やすために必要な追加的費用を検討するなど、cost-effectivenessを評価する検討も増え、薬価にも反映されるようになっていきます。

現場としては、必要性の低い検査・投薬を減らす、入院期間を短くする、治療適応を慎重に判断する等の対応が考えられます。ただ、何れも言うは易く行は難しです。

非典型的な症例や専門外では検査に頼りがちになりますし、必要のない検査という判断自体が難しいです。また、特に救急外来等では、患

者の希望（医師の説明技量も不足しているのだと思います）や医療従事者の安心のために「念のため」の診療が行いがちです。また、医療的には入院を要さない、退院できる状態であっても退院先がないため入院を続けざるを得ない、という社会的入院もしばしばあります。地理的な要因、家族、介護施設の状況が背景にあります。

費用対効果については、個々の症例ごとに治療で期待されるアウトカムや患者・家族の価値観も考慮して治療を相談、選択することが医師の専門性のひとつだと思います。しかし、治療効果や副作用には不確実性も多く、患者個人の予後改善の価値評価は難しいことが多く、個々の症例で費用対効果を判断することは難しいというのが実感です。また、それぞれの現場で薬価等も考慮して治療適応を判断すべきとの考えもありますが、薬剤承認や薬価設定は国によって調整されているため現場では医療保険の範囲で可能な最良の効果を期待できる治療を行えばよい、という人もいて、医療従事者の中でも考え方は様々です。限られた医療資源をどのように投資するのかという点は、より大きな視点からの検討が必要だと思います。

## まとめ

高齢化に伴う島根の医療の問題点のいくつかについて述べました。重要な点を網羅できていないわけではありませんし、国・社会の中の医療という視点を欠いていると思いますが、日々の診療の中で感じていることを述べました。

「小医は病を癒し、中医は人を癒し、大医は国を癒す」という言葉があります。臨床医としては、まずは目の前の病、人を癒すことが重要で、良い小医、中医になりたいと思うところです。しかし、そのためにもより大きな視点も忘れないようにしなければと思います。

私が祈月書院の奨学生となったのは34年前。役員としてのお手伝いを始めたのは10年間近く前であるが、この間に日本の奨学金をめぐる事情は大きな変化を遂げている。この変化は教育費用の問題にとどまらず、社会的格差、賃金の問題、労働市場の構造、国の財政といったさまざまな分野の問題点と深く結びついている。今回は、公的制度による奨学金を取り巻く状況と問題点の整理を試みた上で、祈月書院の位置付けと将来的な方向性を検討する資料としたいと考える。

### 背景と変遷

日本における公的奨学金制度は、主に日本育英会（現日本学生支援機構、JASSO）が担ってきた。日本育英会（発足時は大日本育英会）は1943年（昭和18年）に設立されたが、当時奨学金プログラムを担っていた民間企業・団体が不況のため経営困難に陥ったことが背景にある。創設時には無利子の貸与奨学金事業を行っており、卒業後に教職に就き、一定以上の給与水準に達した者は返還が免除される仕組みが導入されていた。その後、大学進学率は増加の一途をたどり、OECD平均57%に対して、日本は約74%となっている<sup>1</sup>。学生数の増大に伴い、公的奨学金制度の柱は財政投融资を利用した有利子奨学金事業に移行した。

従来日本では高等教育は「個人のため」という考えが強く、高等教育の学費負担については受益者負担の原則が浸透している。教育費の公費負担率はOECD諸国の中でも低い水準にあり、私費負担率はOECD中第3位の64.5%にのぼる<sup>2</sup>。一方、子の教育費については原則として親が責任を負うべきとの考え方もいまなお根強く残っている。このような背景から、家計における教育費の負担増加が以前から大きな問題となっている。

### 近年の動向

近年、大学進学率の増加にもかかわらず、日本では中間層の所得水準の減少が深刻となり、親の学費負担が増大した。さらには高い学費がネックとなって子育てを躊躇するという、少子化との因果関係が社会問題となっている。

こうした背景のもと、歴代の政権は教育費の問題を大きな政策トピックとして議論を進めてきた。JASSOでも2011年に減額返還制度、2012年に返還期限猶予制度を設けた。また、2017年には所得連動返還方式奨学金と給付型奨学金制度を導入した<sup>3</sup>。所得連動返還方式は、奨学金受給者が就職した後に、直前の所得に応じて返還額を算出する方法（ICL: income-contingent loan）である。これは、受益者負担を原則としつつ、公的扶助の要素も加味した設計となっている。2020年には「大学等における修学の支援に関する法律」が制定され、低所得者世帯が授業料減免や給付型奨学金を受けられる制度が整備された。この法律の序文では少子化対策という趣旨が明確に打ち出され、条文では「真に支援が必要な低所得者世帯の者」「特に優れた者であって経済的理由により極めて修学に困難があるもの」に支援を行うと定めている。公的な給付型奨学金の導入は、大きな転換といえる。財源も多様化が図られており、一般会計と返済金だけでなく、SDG債（ソーシャルボンド）の発行による金融市場からの調達も行われている。

さらに、岸田内閣では「出世払い」、すなわち在学中は国がいったん授業料を立て替え、学生からは徴収せず、卒業後に所得に連動した額を納付させる制度が議論され、注目を集めた。2024年秋から修士課程を対象に導入予定とされている。

ちなみに、ICLの先進国であり、日本の制度の参考とされたオーストラリアでは、授業料を国と個人が負担し、個人負担分については、所得に連動した金額が就職後に給与から天引きされる制度となっている。この制度を受けるため

の所得要件はないが、教育の質を確保する観点から、成績要件（学校ごとに受給資格者数枠が割り当てられ、成績優秀者でなければこの枠に入れない）が課されている。

### 現代的な課題

上記に述べたような中間所得層の所得水準低下を原因として、現代的な課題が多々生じている。貸与型奨学金を借りる学生が増える一方で、労働市場の変化により非正規職人口が増え、返済を繰り返したとしても卒業後長年にわたって負債を負うことによる、結婚、転職、住宅購入、育児などライフイベントへの影響が大きな問題となっている。特にライフイベントの影響を受けやすく、非正規率の高い女性への影響が大きいとして、男女格差問題の一つとして指摘されている。

### 祈月書院の位置付け

日本の奨学金事業は明治時代に遡るが、日本育英会が設立される前には個人や民間団体が担っていた。民間企業・団体による奨学金制度は現在も数多く存在し、企業の人材確保、社会事業、人格教育などを目的に掲げている。創立主体の個性が非常に強く、団体によって趣旨や制度設計が大きく異なる。内閣府のデータベ

スを手がかりに個々の団体ウェブサイト調査を行った限りでは、祈月書院のように、優秀な人材の育成を主な目的とした給付型奨学金事業を行う団体は少なからず存在する。対象者（理工学生、女性等）が指定され、選考基準が厳しい団体が多い。この点、祈月書院は、人の結びつきと「考える場」の提供を中心に据え、人材確保や特定の思想の実践を目的としていない点が、民間の給付型奨学団体の中でもユニークな存在だといえる。民間事業についてはデータの把握が難しく、公的制度との対比、団体間の単純比較はできない。公的制度と同じ課題を敷衍することは不可能であるが、近年奨学金の問題が課題としてクローズアップされる中、学生への経済的支援に関する社会的意義も大きく変容していることから、近年の事情をまとめてみた。ご参考になれば幸いです。

### 参考資料

- 1) <https://www.mext.go.jp/kaigisiryō/content/000255573.pdf>
- 2) OECD「Education at a Glance 2023（図表でみる教育2023）」
- 3) [https://www.jasso.go.jp/shogakukin/henkan/houhou/henkan\\_hoshiki/shotokurendo/index.html](https://www.jasso.go.jp/shogakukin/henkan/houhou/henkan_hoshiki/shotokurendo/index.html)

## 30数年ぶりの大学生活で「学ぶ」

祈月書院理事  
国際協力機構(JICA)  
(お茶の水女子大学出向中)  
小田 亜紀子(松江南1985年卒)

「みがかずば 玉も鏡もなにかせむ 学びの道もかくこそありけれ」という歌をご存じだろうか。明治9年(1876)2月、国立大学法人お茶の水女子大学の前身である東京女子師範学校の開校時、昭憲皇太后(1849-1914、明治天皇の皇后)が下賜した歌である。「玉も鏡も磨かなければ輝くことがないのと同じように、学業も怠ることなく励むことが大切なのです」とい

う意味で、お茶の水女子大学(以下、「お茶大」)の校歌として歌い継がれている。

2025年に創立150周年を迎えるこの由緒あるお茶大に、思いがけず出向することとなったのは2022年の秋。実はつい最近まで、お茶大がどこにあるかも正確に把握していなかった。2020年、コロナ禍の緊急事態宣言中、在宅勤務続き

で体がなまるからと自宅近辺を何気なく散歩していたところ、風情のある門構えと変わった外観の建物（後で知ったが隈研吾建築都市設計事務所による2019年完成の建物）に出くわした。そう、自宅から徒歩15分という至近距離にその大学はあった。

「思いがけず」というのは、これまでの自分の人生（特に職業人生）での大学との縁のなさ、アカデミックな業績がほとんどないことなどからの実感だ。学部卒業以来、およそ「大学」という場所に足を踏み入れる機会は、20年以上前のゼミ指導教授を囲む集まり、1コマだけ頼まれた国際協力に関する講義、私が所属するJICAとSDGs（国連持続可能な開発目標）関連のイベントを共催した大学への訪問といったところで、本当に数えるほどしかない。さらに現役大学生との関わりはもっと少ない。

そんな自分がちょうど異動するタイミングで、JICA職員が数代にわたり勤務しているお茶大のポストが空き、出向の打診が来たこと、自分の寂しい「業績」欄でもお茶大に受入れてもらえたことなど様々な偶然と幸運が重なり、今、「特任准教授」という肩書きで出向し2年が経とうとしている。



文京区・大塚のお茶大本館前にある「みがかずば」の歌碑

自分が所属しているのは、2000年代初めのアフガニスタン復興支援の枠組みの中で、アフガニスタン女性教員などの日本での研修といった事業を実施する目的で設置された「グローバル協力センター」。専任スタッフは自分を含め3

名と小規模で、センター設立当初からJICA関係者が出向などで勤務してきた。現在、このセンターはお茶大の国際協力関連事業・活動の窓口として機能しており、自分は、共創工学部の教授が務めるセンター長を補佐する「副センター長」という肩書きを持っている（センター長はセンター実務にはほとんどタッチしないので、自分が実質的なセンター代表者である）。センターの機能は独立しており、所属する学部・研究室があるわけではないので、大学の様々な周辺業務（入試、入学・卒業式、教授会、その他学部に関わる様々な会議・業務）に関わることも、学生の研究・論文指導も特にない。お茶大生の国際協力・開発途上国に対する関心や参加意欲を促進するための選択科目授業やイベントを、時にはJICAの同僚の支援を得て企画・実施したり、お茶大がJICAから受託し実施する研修（開発途上国の技官・行政官を招聘し約1ヶ月間講義・視察・ディスカッションなどを実施）のアレンジを行ったりすることが主な仕事だ。

この2年間で、「グローバル協力センター副センター長」「特任准教授」をまがりなりにも務められたのは、自分の30数年の国際協力実務の経験に価値を認め、温かく迎えてくれたお茶大や、慣れないながらも開発途上国の現場・現実を伝えようと取り組む自分の講義に熱心に耳を傾けてくれた優秀なお茶大生のおかげと感じている。

基本的に静かに過ぎていくお茶大での時間。その中で、（自分としては）最もアツい！と感じるのは、夏期休暇期間中に実施する「海外スタディツアー」だ。

グローバル協力センターに所属する講師とペアになり、募集・選考を経て決定したお茶大生数名（46名）を引率し、1週間強の開発途上国へのスタディツアーを実施する。予算・渡航費の関係上、あまり遠くの国には行けないため、行き先は主にアジアだ。2023年はカンボジアとブータンにそれぞれ6名の学生を連れ、ツアーを実施した。

「スタディツアー」＝「真面目な場所の訪問・見学」「ボランティア体験」などのエッセンスが入った旅行？との印象をお持ちの方もいらっしゃると思う。しかし、お茶大のスタディツアーは少し色彩が異なる。ツアー実施前・実施後には、10回ほどの出席必須の授業を実施する。授業には、ツアー先の国の概要・現状と課題の把握、自らの疑問・関心に基づく独自の「調査テーマ」決定、テーマに関連する書籍の読み込みなどの事前学習・現地での調査項目設定、質問項目の準備、調査結果の取りまとめ、そして大学祭での発表が含まれる。これらはツアー参加とセットになっており、1セット全てを終えた学生（履修生）に単位が与えられる仕組みだ。

開発途上国を「顧客」とする事業に長年携わってきた自分がこの「海外スタディツアー」に関わる意味は？ 自分がいることで、スタディツアーにどのような「付加価値」が生まれるのか？ 正直な感想を言うと、「困ったとき、迷ったときに少しは頼りになる大人」以上の自分の存在意義（価値）は見いだせていない。他方、「海外スタディツアー」に関わることで自分の学びは大いにあった。このような体験をさせてもらえるお茶大に、そしてスタディツアーに参加してくれた学生には「感謝」の一言だ。

- 学んだことその1：恵まれた環境のもと調査や出張を実施していた自分に気付く

スタディツアーの日程検討・訪問先選定とアポ取り付け、航空便・ホテル・車・ガイドの手配、各種経費精算などは基本的に全て自分で行う。ツアー先の国にJICA事務所はあるが、あくまでも訪問先の1つ、便宜供与はない。訪問先1つ1つにつてをたどりながら連絡し、都合を聞き、日程を組み合わせ、やりとりを繰り返し準備していく。JICAでの「調査・出張」アレンジ（行き先のJICA事務所に日程案を送り、アポ取り付け・宿舎・車両手配を依頼、日本の事務担当スタッフに旅費や調査経費の支出・精算手配を依頼、自分は調査の中身に集中）とは大違いだ。長年、開発途上国

で事業を実施してきたJICAが持つアセットに甘え、あぐらをかいてきた自分に気づくとともに、1つ1つの活動・事業で得た「縁」をかけがえのない財産とし、今後の自分に生かしていくことの必要性・重要性を実感した。

- 学んだことその2：学生の新鮮な反応、変化から、「現場」の大切さを実感

コロナ禍もあり、「海外／開発途上国に行くのは初めて／慣れていない」という参加学生が多かったスタディツアー。現地滞在中はほぼ毎夜、その日の調査や行程で感じたこと、「もやもや」したことを話し合う「振り返りの会」を行った。そこには、資料の上でしか知らなかった開発途上国の貧困の現実を知り、何も出来ない自分に打ちのめされ涙ぐんだり、現地の人々との交流での気づき・学びを楽しそうに語ったりするお茶大生がいた。真面目で優秀、ときとして考えすぎて行動に踏み出せないところもあるお茶大生という印象を持っていたが、彼女たちの生き生きした表情と前向きな姿勢というポジティブな変化を肌で感じられ、何においても「現場を見ること」「現地の人々の声を聞くこと」が気づきや変化を生み出すのだと実感した。

- 学んだことその3：市井の人々の生きた言葉と雰囲気は学生を伴うツアーだからできること

ボルボト政権時のカンボジアの状況、内戦中に数多く埋められた地雷による被害者の存在は文献情報などで把握していた。しかし、スタディツアー中に行った、ボルボト時代に強制労働に従事し父親を亡くした当事者、地雷で足をなくし乞食で生計を立てている被害者とのコミュニケーションや率直なやりとりなどは、JICAでの調査・研究ではなかなかできない。「援助機関」「専門の研究者」という肩書きなく「学生です、学びです」というスタンスだからこそ、市井の人々もごつくばらんに語り、反応してくれるのだろう。参加学生が取りまとめた調査レポートはいずれも多様な視点、印象に残った現地の人々の言葉がちりばめら

れており、1つ1つが貴重な財産だ。

スタディツアーに参加した学生が、みな国際協力の道を目指すわけではない。割合から考えると、国際協力「以外」の進路を選択する学生の方が圧倒的に多いだろう。それでも、彼女たちが、世界の大部分を占める開発途上国の人々や生活を身近に感じ、それらと自分の周りの世界とのつながりを考えながら社会に出て行くことには大きな意味がある。その過程に少しでも関われることは大きな喜びだ。

アツイ「海外スタディツアー」は今年の夏も実施予定。学生にとっても、自分にとっても、

かけがえのない学びと気づきとなる経験ができることを心待ちにしている。



スタディツアーで訪れたカンボジア南部タケオの農村風景

## G7議長国としての一年を振り返って

財務省国際局  
舟木 健(出雲2015年卒)

### はじめに

元奨学生の舟木と申します。現在財務省国際局で勤務しており、昨年（2023年）はG20/G7担当、本年は国際通貨基金（IMF）担当を務めております。昨年はちょうど日本が7年に一度のG7議長国であり、私自身G20/G7の現場近くでその様子を見聞きする機会を得た経験から感じたことなど、紹介したいと思います。

### G7/G20財務大臣・中央銀行総裁会議とは

G7/G20では、外務省が担当する首脳間の会合であるサミットと、各関係省庁が担当する閣僚会合があり、その一つとして、財務大臣・中央銀行総裁会議（財務トラック）が行なわれています。G7/G20の両方において最初に財相会合が行われ、世界金融危機（G20）等を受けて首脳会合に拡大していったという経緯もあり、世界経済・金融情勢にかかる財務トラックのインパクトは大きな存在感を持っています。

### G7議長国としての日本

2023年には、日本がG7議長国としてG7における議論を主導する役割を担いました。一年を

通して大臣・総裁級会合を全6回（対面5回、ヴァーチャル1回）開催し、これらにおける議論を取りまとめた5つのG7共同声明（財務・保健合同会議での共同声明も含む）を発出するなど、様々なグローバルな課題について議論を行い、対外的にもメッセージを出してきました。

前年に引き続き課題として、ロシアによるウクライナ侵攻を受けたウクライナへの支援を、優先事項として1年間継続して取り上げてきました。具体的には、G7として財政支援を継続し、ウクライナの財政ニーズの充足にコミットするとともに、ロシアに対する資産凍結をはじめ、制裁措置の継続・対象拡大等、制裁の実効性を強化する取組を推進しました。

低・中所得国がクリーンエネルギー関連製品のサプライチェーンにおいて、より大きな役割を果たせるよう協力するため、強靱で包摂的なサプライチェーンの強化（RISE）に向けたパートナーシップを、日本主導の下、非G7を含む有志国・世銀とともに創設しました。

国際保健についても、オンラインでG7財務大臣・保健大臣合同会合を開催し、財務・保健における緊密な連携が重要であること等につい

て議論し「財務・保健の連携強化及びPPRファイナンスに関するG7共通理解」を公表しました。

経済のデジタル化対応の観点から、国際課税について「二つの柱」の解決策の迅速かつグローバルな実施に向けた議論をOECDと協調して主導し、G7として途上国への実施支援の更なる提供にもコミットするとともに、中央銀行デジタル通貨（CBDC）について、その導入がもたらしうる機会とリスクに途上国が適切に対処できるよう、「CBDCハンドブック」の作成を後押ししました。

低所得国を中心に、開発途上国の公的セクター（政府や政府系機関等）による海外からの借入が増加し、債務持続可能性への懸念が高まりつつあることを踏まえ、低所得国向けに債務救済を行うための「共通枠組」の実施を強化するG20の取組をサポートするとともに、中所得国であり「共通枠組」の対象外であるスリランカについて、広範な債権国間の協調体制を確立するため、17か国のパリクラブ（債務返済困難に直面した債務国に対し、公的債務の救済措置を取り決める非公式な債権国会合）債権国と非パリクラブ債権国が一堂に会して債務再編交渉を行う債権国会合を創設しました。債権国会合において、日本は、インド、フランスとともに共同議長国として議論を主導しました。また、日本が主導し、世銀の保有する債務データと、債権国から共有された債権データとの突合に取り組みました。

地球規模課題への対応のため、世界銀行等の国際開発金融機関（MDBs）の機能強化に向けた改革（MDB改革）の議論も主導しました。IMFが配分する特別引出権（SDR）を活用した低中所得国支援については、日本が世界に先駆けて貢献率を引き上げたことで、世界全体で1,000億ドルの目標を達成しました。また、IMFが低所得国を支援する貧困削減・成長トラスト（PRGT）の資金動員目標を達成し、10月にモロッコ（マラケシュ）で開催されたイベントにおいては、IMF専務理事より日本への謝辞が述べられています。

その他、OECDにおける、新興途上国が「より多くの、より良い、安全な」対外直接投資（FDI）を受け入れるための支援戦略の策定へ

の支援や新興途上国・アフリカ諸国との連携にも取り組んできました。

## 現地での存在感

私自身が現地に出張して参加したG20ニューデリーサミットや、世銀/IMF総会、G20/G7財相・中銀総裁会議の際には、国際金融機関強化、途上国債務問題、サプライチェーン強靱化等の議論において、「グローバル・サウス」と呼ばれる新興途上国も含む各国から、日本の知恵を求められ、議論への貢献への感謝が表明される局面を多く目にしました。

長年にわたる取り組みの中で、日本が培ってきた専門性や議論への貢献がこうしたフォーラムにおける存在感につながっていることを実感しました。

## 最後に

国際社会が多様化する中、考え方や立場が全く異なる国々の間で一つの結論を導き出すのは難しい局面もあります。特に、地政学的な問題について立場の隔たりが大きい国々を含み、「グローバル・サウス」と呼ばれる国々の発言力がますます高まっているG20などの場においては、合意形成の難易度が上昇している側面もあります。しかし、例えばG20のコミュニケでは、ほぼ全ての論点において合意を見出すことができたように、粘り強い交渉によって各国間の共通の理解を醸成することは不可能ではありません。

「グローバル・サウス」の経済力が高まる中、国際金融機関等における発言権や、国際的なルール作りの観点でも、経済規模に応じた発言力の拡大を求める声が高まっています。しかしながら、世界経済においては、必ずしもGDPを始めとする相対的な経済規模の拡大が発言力に直結すべきではなく、国際金融システムにおいて、受益者・配分を受ける側として振る舞うだけでなく、国際金融秩序の維持に貢献するとともに、国際経済における公正なルールの遵守といった責任を果たす必要があることを理解してもらう必要があります。その意味で、こうしたフォーラムは「グローバル・サウス」といった国々に、各論点における議論を通して世界経

済における基本的価値観やルール的重要性を伝えていく場としての機能も果たしていると考えています。

一方、世界経済は、深く相互に関係しあい、一旦危機が発生すればたちどころに各国に伝播する可能性のある共有資産であり、仮に立場の

異なる国であっても、建設的な参与が不可欠です。その両面において、混迷の度合いを深める世界においても、粘り強く議論を行い、合意を見出す努力を続ける機会が確保され続けることは、個別具体的な課題への対処を超えた、より広い文脈でも意義深いことだと考えています。

## 外部規範と内部規範

株式会社クラシコム  
高尾 清貴(松江北2005年卒)

最近読んだ本がとても興味深く、なぜ自分が今のような考え方を持つに至ったのかを、自分なりに説明できるきっかけとなりました。

僕自身は、2005年から2011年頃まで、大学生・大学院生として祈月書院に参加していました。後述しますが、あの時期はぼくにとって、人格を形成する大事な時期の一つでした。書院報は、当時のぼくと同じ年代の方がたくさん読者にいらっしゃることから、もしかしたらどなたかの参考になるかも・・・と考えて、本のサマリーと、そこから振り返った自分の半生について書いてみます。紹介する本は「ハラスメントは連鎖する」という本です。2007年、安富歩さん、本條晴一郎さんの共著として、光文社から出版されています。自分の子育てとか対人コミュニケーションは大丈夫か??と、内省をものすごく促されて、読んでいて心にグサグサきます。読むのに体力を使うし、そもそも出版されたのは2007年で、いまは絶版になっているので、図書館で借りられないと読むのはかなり困難（ぼくの住んでいる地域の図書館にはなくて、取り寄せてもらって借りました）なので、これをぜひ読んで！とおすすめするのも難しいので、サマリーをまとめます。

この本は論理構成が緻密に書かれており、一部を抜き出して正確に伝えるのはけっこうなチャレンジではありますが、頑張ります。

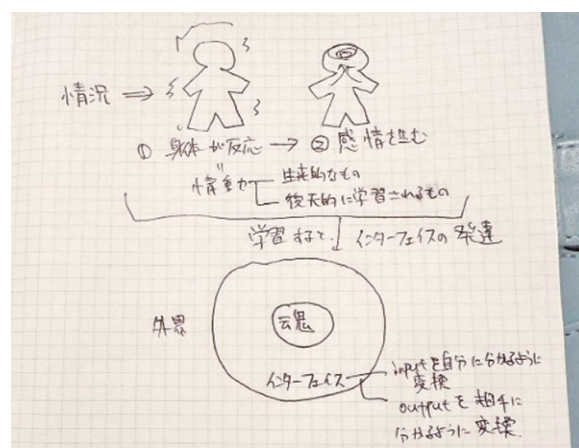
タイトルに「ハラスメント」と入っており、

「いや、ぼくはハラスメントをしたこともされたこともないが?」と思ってしまうのですが、サマリーを読んでいただければ、これは人間理解についての本だし、どう生きるかという本だということがわかりいただけるかと思います。

### 人の認知は、情動、感情、(そして意味付け)に分けることができる

まず、人の認知のあり方についての整理が行われます。

図にすると下記の通りで、ある状況に接したときに身体が反応して情動が生まれ、これを脳で処理することで感情が生まれると整理されています。さらに、生まれた感情に対してラベルを貼ることで、理性で処理できるようになります。



外界と魂（これは宗教的な意味ではなく、人間が生まれたときからもっている本来の運動

状態のことを指す用語として使われているので、びっくりしないでください。)の間に、インターフェイスが存在します。

このインターフェイスは、身体と似たような意味合いで使われていると考えていいと思います。インターフェイスの役割は、インプットを自分にわかるように変換し、アウトプットを相手にわかるように変換するもので、人はインターフェイスを通じて外界とコミュニケーションを取っています。

人の認知は理性だけで行われているのではなく、身体の反応が根本にあるという点を強調したいです。体→心→頭、という順番で、全部を使っているのです。

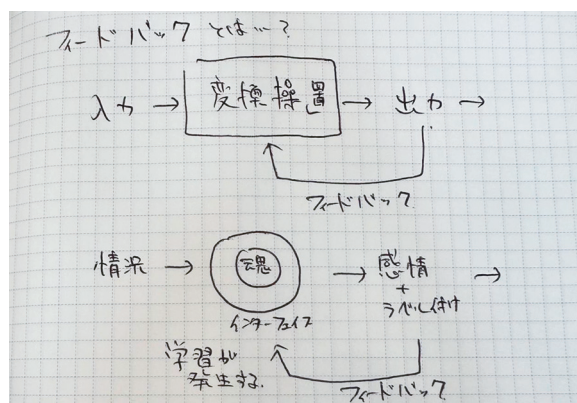
ここからは僕なりの解釈ですが、この考え方をうけると、例えば「言語化力」という言葉の捉え方が変わってきます。

僕は、「言語化力」という言葉から、ある事象にいかに関性でラベリングするか、もっというと、いかに語彙を増やすかという点に比重が置かれている印象を受けていました。しかし、ラベリングは最終段階であって、まずは、ある状況に置かれたときに心が動いたか＝情動が発生したか、ということを知覚できるかが出発点になっている、と捉えることができるのではないのでしょうか。だから「言語化力」を鍛えるためには、暗記も大事かもしれないけれど、インターフェイスを発達させ、自分の情動にセンシティブであることが必要となるといえます。

#### フィードバックー学習ーインターフェイスの発達

さて、この情動、感情という認知の形式を前提にすると、フィードバックという機構が重要になってきます。

人間を一種の変換装置にみたてると、インプット(状況)を処理して、感情を得て、これを言葉にしてアウトプットし、その結果がさらにインプットされます。この流れをフィードバックと呼び、文中ではウィナーの定義を引いて「フィードバックの原理とは、自分の行動の結果を調べて、その結果の善悪で未来の行動を修正すること」とし、さらに、回路そのものが、自らを書き換える能力を備えている場合、それを「学習」と呼ぶ、と紹介しています。



なぜこの学習が重要かというと、現実の複雑さを前にすると、すべてのパターンを事前に想定し計算し切ることは不可能であり、フィードバックによって自分の認知を修正するしか現実世界に適応して生きていく方法がないからです。学習の効果は以下のように説明されます。

学習とはインターフェイスを発達させ、世界に対する見方や取り扱い方を変えることである。

「学習」についての説明だけだと、この概念の面白さが伝わらないので、この本の本題である「ハラスメント」の説明に移ります。

#### ハラスメント＝学習をさまたげること

そして、ハラスメントとは、このコミュニケーションによる学習の過程に対して、次の二つのメッセージによって学習を断ち切ることによって起こる、と説明されています。

ハラスメントとは「人格に対する攻撃」「人格に対する攻撃に気がついてはいけないという命令」の二つの合わせ技であり、情動反応の否定とラベル付けの強制によって実行される。

これは具体例を出した方がわかりやすいと思うのですが、僕は子育てにおいて思い当たる節がたくさんありました。

雷の音を怖がる子供に対して、仮に「雷がこわいなんておかしい!」と言ったとしたら、情動反応の否定とラベル付けの強制と言えるでしょう。情動反応の否定とラベル付けの強制が何故良くないか。それは、学習が正常に行われないうようにする行為だからです。学習が、フィー

ドバックを適切に取り込むこと、さらにフィードバックの機構そのもののアップデートすることと定義されているので、自分の情動と感情に対するメッセージが適切でないと、学習がうまく起きません。

本書ではこういう表現はされていませんが、ハラスメントは「心を殺す行為」ということなのだと思います。

僕の挙げたエピソードは人格攻撃を含まないので、「ハラスメント」にまで発展しなさそうだけれど、わかりやすく極端なやり取りに置き換えるとこういうことが起きうる、ということが問題提起されていると思います。

雷が鳴って、怖いと思い、それを父親である僕に伝える。

それを聞いた僕から雷を怖がるなんておかしい！と自分の情動反応を否定される。

あれ？これを怖いと思うのって変なのか、と子どもたちが情動のスイッチをオフにしてしまう。

適切なフィードバックが得られず、インターフェイスが発達しないので、さらに次の情動反応も封じられてしまう・・・

## ハラスメントの結果起きることの例：外部規範へ無批判に従う

ハラスメントによってフィードバックの回路が正常に駆動しなくなる弊害が、本書ではいくつか紹介されていますが、僕が一番納得感をもったのは「恥」と「罪悪感」の対比でした。

なにかがうまくいかなかったとき、恥は、自分の内的規範に沿うことができなかったときの感情であり、罪悪感、自分の外的規範に沿うことができなかったときの感情である、と整理されています。

内的規範とインターフェイスがずれて、恥を感じた場合、インターフェイスの修正という学習が行われますが、罪悪感を感じた場合は、魂とインターフェイスを切り離して、外的規範に合わせようとしてしまいます。情動を無視した、心が死んだ行動しか生まれなくなってしまいます。そして、遮断された回路で構築された自分の認知に従い、他者とコミュニケーションをとるので、ハラスメントが連鎖していくことにな

るようです。

## 外部規範に無批判に従っていた僕

さて、ここまで、本のサマリーを紹介したのですが、まさに、最後に紹介した「外部規範に無批判に従う」という状態にあることを自覚し、そこから如何に抜け出すかというのが僕の半生だったんだな、ということに気がついたのです。

時は、僕の中学時代に遡ります。

ある日休憩時間に友人と話をしていた僕は、うっかり学校の窓ガラスを割ってしまいました。話の流れで振りかぶった手が、ガラスにあたって割れてしまったのです。僕自身を含めて誰も怪我をしなかったので大事には至らなかったのですが、ガラスが割れた瞬間、僕の頭に「やばい。お母さんに怒られる」という考えが過ぎりました。しかしその次の瞬間、「いや、中学生にもなって、ガラスを割ってお母さんに怒られるかもって思うのはやばくないか」ということも考えました。

実際、当時母はとてよく怒る人で、さらに「頭ごなしに子どもを否定する」タイプの怒り方をする人でした。

当時はマザコン（マザーコンプレックス）という言葉も流行っていて、「自分はマザコンというやつなのかもしれない・・・」という認識でした。

しかし、冒頭で紹介した本の考え方に沿うと、これは自分が「母親という外部規範」に無批判に従っていたということを強烈に自覚した瞬間だったんだな、と振り返ることができます。この出来事があったからと言って、何かをすぐに変えられるわけではありませんでした。次の転機は、高校の化学の授業のときに訪れました。

## 科学はほくに説明してくれる

化学の授業の中で、2種類の液体を混ぜて沈殿を生じさせるという実験をしました。たしか、硝酸銀の水溶液と塩酸を混ぜると、塩化銀が白色沈殿として得られるという実験だったと思います。

元々化学の授業はとても好きだったのですが、その実験をしながら「化学という学問は、眼の

前で起こっている、この沈殿が生じるという不思議な現象をすべて説明できるんだ」と感動して、そこから一層化学が好きになり、大学では化学を専攻することとなりました。

僕は、化学の科学的側面がすごく好きで、それは、ものごとを全部説明できるからだ、原理を解き明かせるところが面白いんだ、と考えていました。

しかし、内部規範、外部規範という考え方を知り、もしかしたら僕は「科学はものごとを説明できる」ではなく、「(お母さんと違って) 科学は僕に説明してくれる」というポイントに強く感動していたのかもしれないと今になって思いました。

### 化学の研究の最先端では「個の発露」がとても大事だった

一般に「科学」というのは、権威と結びつけて考えられる傾向が強いように思います。そのため、科学は外部規範・内部規範のどちらの性質が強いかというと、外部規範ではないかと思われるかもしれません。しかし、学部四年生から修士二年生まで、ある程度世界的に注目される研究室に所属して感じたのは、最先端の科学の現場では個人の興味の方向性がとても大事だということです。

Ph.D.をイラストで説明するブログがあります。(僕自身は修士までしか出ていないので、Ph.D.の話をするのは気が引けますが・・・)  
(<https://matt.might.net/articles/phd-school-in-pictures/>)

人類の叡智全体を一つの円で表現したときに、その円の中において、小学校、中学校・・・と勉強していくに従って、一人の人間が把握できる円の大きさがだんだんと大きくなります。そして、大学での専門的な学びを通して、円の形から、だんだんと尖った形に変わりながら円の外周に近づき、Ph.D.を取得できたとき、ほんの少し、ほんの少しだけ、円の外周を広げている。Ph.D.とはなにかを説明するととても秀逸なブログだと思うのですが、僕がポイントだと思うのは、どの方向に円周を拡張するかは、各研究者の興味関心や思いが決めていることが表現されている点です。

実際にどんな研究テーマを設定するか、何に興味をもつのかは、研究の現場にいる個人の思い次第などところがあり、科学は、その成り立ちにおいては、個の発露がとても重要であるということを知りました。

高校の化学実験で感じたように、「科学」が自分の外部規範としてではなくて、内部規範として、僕の人生の大事な一部になっている理由がこのあたりにありそうです。

### そして今、「フィットする暮らし、つくろう」をミッションとする会社で働いている

その後、修士課程を出て、素材メーカーで約8年研究開発をしたあと、約6年前にいま働いているクラシコムという会社に転職しました。

この会社は、ミッションとして「フィットする暮らし、つくろう」を掲げています。このミッションは、他の誰でもない、自分自身のものさしで、満足できる暮らしを作ろう、という意味をもっており、ここまで説明してきた、外部規範・内部規範の考え方に沿ったもので、なるほど、だから僕がこの会社にたどり着いたのか、と感じました。

ここまで、長く自分の半生を、一冊の本の考え方を軸に振り返ってきました。もし、読まれた方の参考になるものがあれば、うれしいです。



2024年夏—パリオリンピックでは、日本をはじめ各国の代表選手たちが繰り広げる熱戦を毎日のように観ていました。約2週間という短い期間に観た競技は限られたものでしたが、人生の全てを賭けて競技に打ち込む選手たちに歓喜し、また悔しがる日々。普段接することのない競技のルールを覚える機会にもなりました。また甲子園での大社高校野球部の大活躍！！なんとまあ素晴らしい試合で、大応援会となりました。高校野球の素晴らしさを改めて感じさせてくれた大社高校！感動をありがとう！—が過ぎていきました。

さて、はるか昔、地元の高校を卒業した後、大学生活4年間にわたって、祈月書院の奨学生として大変お世話になりました。祈月書院全体の集まりとしては、初夏に昼食を取りながらの会合（借りてきた猫で、きっと美味しかったであろう料理を味わうココロの余裕はありませんでした）、秋には少し遠出となる一泊二日の会合があり、安部先生を始め、OBの皆様、先輩や同級生、後輩と語らった記憶があります。

大学卒業後は地元の放送局に入社し、早いもので今年はちょうど勤続30年となりました。

入社当時は久しぶりの実家暮らしを少々窮屈に感じながらも、今思えば贅沢なことに上げ膳据え膳生活をさせてもらいました。新米の社会人は周囲の先輩方に助けてもらいながら、慣れない仕事に取り組んでいました。

最初の配属先であるラジオ編成部で約7年間で過ごし、2001年に人事担当部署に異動となりました。その後今に至るまで20年以上にわたって「人事」として過ごしています。

人事担当部署は、業種を問わず様々な会社に在る部署です。入社前の採用試験（今はその前段のインターンシップ）から、入社後、やがて時を経て退職に至るまで、社員の世話係としての役割があります。特別なスキルが必要な業務、難解な業務はありませんが、ほとんどが気を遣

う業務、煩雑な業務であり、守備範囲はかなり広いといえます。社内の様々な立場の人と日々接しており、その結果、人知れずため息をついているのが「人事」なのです。（自分の身の回りだけ整えていれば良い人達がウラヤマシイ。はい。）

私の基本的な性分としては、幼い頃から、置かれている環境や立場について特段の疑問や疑念を抱くことなく受け入れる。深く突き詰めて物事を考えることはしない。行雲流水。軋轢や波風立てることを好まず、穏やかに過ごせればそれで良し。周囲の人から良く思われたい。少なくとも悪意を持たれたくない。そして、どちらかというところ楽天的である。そんな性分ですから、生まれてから長いこと風の人生を過ごしてありました。が、約10年前に一大事が起こりました。

その数年前から経過観察を続けており、ある年の暮れに受診したところ、すぐ精密検査を受けるよう言われました。それまでこれといった病気にかかったことは無く、親に丈夫に産んでもらって有難いなあ、と思っていましたし、今思えば自分の健康を過信していました。まさか自分がねえ、まさか・・・と祈るような思いで受けた検査の結果は、厳しいものでした。恐れが現実となったときに、なんとなくこんな感じなのかとぼんやり描いていた未来図がガラガラ音を立てて崩れていき、目の前が真っ暗になるような衝撃を受けました。当時、祖父母や義父母は既に他界していましたが、それでも四十代前半の自分にとって「死」というものはまだまだ遠くにあり、ぼんやりとかすんでいました。それが突然目の前に迫ってきて、断崖絶壁に立っているような心持ちの日が続きました。

いっぽうで、中学生と小学生だった子供達にとって何よりも大事なことは、母親である自分がこの世に存在し続けることだ、という考えがふつふつとわいてきました。こう書くとまるで“子供第一で常に寄り添っている母親”のようですが、全然そんなことはなく、家事に協力的

な夫と共に、出来る人が出来るように手分けしています。そもそも子供というのは多くの人と接することで社会性や常識や自律性が身につくという考えです。ただ、子供がある程度大きくなる時期までは、母親の存在は必要だと強く思いました。年が明けてすぐ入院し、治療、退院後の自宅療養で仕事を休むこととなりました。子供達のためにも何としても生きていたい、という思いがあるいっぽうで、もしかしたら東京オリンピックを見ることはかなわないんじゃないか、何度も良くない未来を想像してしまう自分がいました。

幸いなことに約1年後に復職し、その後今に至るまで経過観察しながら過ごしています。

それまではぼろ考えることがなかった自分の「生きる意味」や「誰のために生きているのか」「自分は誰にとって必要な存在なのか」について、療養中に深く思いをめぐらすこととなりました。軋轢を嫌って飲み込んでいた言葉も、言葉にしないと相手には伝わらないと考え、自分と相手のためになると思うことは言葉に出して伝えることにしました。

特に子供に関しては、(自分が生きているからには、子どものために言えることは言うし出来ることはやろう)という思いから、それまで、気になりつつも(ま、どうにかなるかな)とやり過ごしていたようなことでも、言葉に出して行動するようになりました。

子供が中学に入学してすぐ、担任の先入観で悪者扱いされた時は、担任に連絡を取って夫と共に学校に行き、話し合いの場を設けましたし、どんどん成績が下がっていくのに気づいた時は、改まって子供とじっくり話をしました。勉強のやり方が分からないというので、まず手始めに今週は国語、今週は数学、と、週1回の小テストで10点満点を取ろうとモチかけました。それを何度か繰り返した後、中間テスト期末テストでは横に座って勉強し、といった具合で、子供と共に約30年ぶりに中学校の勉強をしました。「あのままだったら違う高校に行ってたし、自分はバカなんだと思い続けていたと思う。お母さんのおかげだわ。」そう感謝されるのは嬉しいことですし、気になりつつも何もしないでいたら、子供の歩む道が違っていたと思うと、口に出し

て行動して良かったなあ、と思っています。

せっかくこのような機会を得ましたので、これを読んでいらっしゃる皆様にお伝えしたいこと。

年齢に関係なく、今、ご自身が健康だと思っても、定期的な健診を必ず受けてくださいね。

健診を受ければ安心、ではなく、所見があれば経過観察を続けて、気になることがあればセカンドオピニオンですよ。大切な人を守ろうと思うなら、まずはご自身を大切にしてください。(私のように??) 遠慮深い人は自分のことで大げさに騒ぎたくないでしょうが、ご自身の人生＝周囲の人の人生に関わってきます。まずご自身が心身ともに健康じゃないと、大切な人のケアは出来ない。ということです。

そして、奨学生の皆さんにお伝えしたいこと。

高校卒業後、特に(自分も親に負担してもらっていましたが)自宅外学生を持つ親の金銭面の負担はめっちゃくちゃ大きいです。共働きのわが家ですら青息吐息なのに、世の中の親御さんは本当によくやっておられるな〜、と感心しています。親御さんに対して感謝の思いがあれば(あってほしい)、心にしまっておかず、ぜひ言葉に出してほしいと思います。言わなくても分かってるでしょ〜と思うかもしれませんが、言葉で表してもらえると、親のモチベはぐんと上がります!我が家では、上の子らは自宅通学生で授業料のみの負担ですが、現在高校3年生のリケジョが今のところ自宅外通学を希望しており、来年度から非常にシビアな数年間が待ちうけているのを想像しただけで既に恐ろしい。

良いことも悪いことも経験した今、心に在るのは「禍福は糾える縄の如し」どなた様も心身共に健やかに過ごされますことを祈念しております。

### はじめに

私の会社ではときどき「キャリアヒストリー」を聞く機会が提供される。社内で一定以上の評価を得ているリーダー（管理職）が、これまでの経歴や経験、成功体験や失敗体験、キャリアに対する考え方等を話すのである。社員がキャリアパスを描くための参考にしたり、モチベーションを上げたりすることを狙ったものだと思う。

祈月書院より本寄稿の話が舞い込んできた事も有り、これを読むであろう学生や社会人数年目の皆さまよりは社会人として幾分か先輩であることを盾に、この機会を活用して私のキャリアヒストリーについて書いてみる。諸先輩方においては、寛容な心で受け止めていただきたと思う。

まずは、私自身の大学から今の会社までの簡単な経歴、つまりキャリアを書いておく。大学では獣医学科に身を置きながら、製薬会社を就職先として選択した。その会社では、製剤開発の分野で研究開発職として働いた。その後、きっかけがあり今の会社であるヘルスケアカンパニーに転職した。今の会社では部署異動も挟み、現在はプロジェクトマネジメントを主に、協力会社のマネジメントや現場改善も行っている。様々と変遷しているようにも見えるが、私の中で最も重要なことは変わっていない。

### 私のキャリアヒストリー

ここから少し掘り下げて、私のキャリアヒストリーを紹介していく。すべてを書くと長くなってしまうので、キャリアという観点で現時点では最も大きな分岐点であった、大学時代の決断の話を中心に書こうと思う。

私が獣医師という仕事を知ったのは中学生のときだ。その頃から大学入学まで一貫して、獣医師になることを目標にして、大学はどうか獣医学科に入ることができた。大学二年生にな

り二十歳を迎えるころ、いきなりではあるが、最も大きな分岐点を迎える。専門科目も増えてきて、獣医師というものが少しずつ見えてきたときに、私は「獣医師になる」ことをあきらめた。何故か？

話は少し逸れるが、「獣医師」という仕事はどういうものか皆さまはご存じだろうか。これは獣医師に限らない話だとは思いますが、特に専門的な職業であればあるほど、イメージ先行で実際の仕事を知らないということが多い。ここ数年、毎年高校生と話す機会があるのだが、医学部を志望している学生に「医師としての仕事」がどういうものか聞いても、専門科は違えどたいてい「病院で働いている」という答えしか返ってこない。そういう私も「獣医師になる」ことを目指していた当時は、「獣医師」＝「動物のお医者さん」、つまり小動物臨床しか知らなかった。ペットショップでの飼育管理とワクチン接種、乳牛の健康管理及び受胎サポート、競走馬の診察及び治療、公衆衛生及び防疫（国家公務員）、医薬品メーカーでの毒性評価。これらはいずれも私の同期が就いた職業だが、私の「獣医師」感の中にこういう職業は当時入っていなかったのである。

私の「獣医師になる」という目標の根幹は、「大好きな動物を助けたい」という想いだけだった。私が「獣医師になる」ことをあきらめたのは、獣医師という仕事に対する理想と現実のギャップが大きすぎて、埋めることが困難だと思ったからだ。私の理想とする獣医師像は「動物のために献身する姿」であった。実際、獣医師にはそういう側面もあるだろう。しかし、あくまで私見で極論的ではあるが、ほとんどの獣医師は「人のため」に働いているのが現実だ。先に挙げた仕事も基本は人のための仕事だ。小動物臨床であれば、治療すべき動物に対する判断は飼い主の意思が尊重されるし、ときに飼い

主のメンタルケアのようなことも必要だ。牛や馬に至っては経済動物であるため、場合によっては、治療ができるとしても安楽死を選択するケースもある。私は経済動物自体を全く否定しないし、それらの維持繁栄に努めている多くの人へは尊敬の念に堪えない。「人のため」に働く獣医師もとても立派な職業だ。ただ、私自身は獣医師としてやりがいを持って仕事するイメージを持てなくなってしまった。

迷いを持った私は、自らを見つめなおすために、自分がどのような仕事をしたいのか、なぜ獣医師になりたかったのか、自分の興味、想い、好きなことを原点に戻って整理した。その結果、「動物」と「医療」という二つの軸が自分の中にあることを認識した。私が思い描いていた「獣医師」は、まさにこの二軸が重なる場所だったのだ。

結果的に私は「動物」ではなく「医療」をキャリアの軸として選択することにした。

そこからのキャリア選択はさほど困難ではなかった。自分の軸が決まっていれば、その先は恐れることはない。その軸の中でどういう方向に行くのかは、先の決断からしたら小さなことである。卒業後は、研究という活動が好きだったことから、製薬会社に行くことに決めた。最初に配属された部署は望んでいた部署ではなかったが、軸がぶれているわけではなかったため、すぐに受け入れることができた。製剤開発という未知の領域であったが、学びながら働きながら、キャリアを歩んだ。

6年程度その会社で働いたが、マンネリ感と子供の誕生をきっかけに転職することに決めた。そのときも「医療」というキャリアの軸は変わらなかった。転職後に最初に与えられた仕事はエンジニアリングである。これもまた、大学の専門とも前職ともかけ離れた仕事であった。それでもその仕事が最終的に「医療に貢献している」ということさえわかっていたら、問題はなかった。また学びながら働いた。2年弱で異動し、今度は2年ほどプロジェクト専任として、前部署とも異なることを求められた。また新たなことを学びながら働いた。その後、直近の2年間は、協力会社のマネジメントや工場の現場改善を任せられ、また一から学びながら実行して

きた。そろそろ手が離せそうなタイミングで、今は次のプロジェクトへの準備を進めている。

## 人生の軸

ここまで、キャリアヒストリーを紹介したがどうだっただろうか。少し納得のいかないように感じた人もいるかもしれない。私自身が人生で「最も重要なこと」と考えている点についてはまだ触れていなかったのもう少し書いてみようと思う。

「医療」というキャリアの軸よりもっと深い、土台となるもの、それは「人生の軸」だと私は考えている。言い換えると「大切にしている価値観」である。当然これは、キャリアを考えるうえでも最も重要である。なんだそんなことか、と当たり前のように感じるかもしれないが、「大切にしている価値観はなんですか？」と聞かれて即答できるだろうか。「その大切にしている価値観に沿って、人生の選択をしてきましたか？」と聞かれて、迷いなく「はい」と言えるだろうか。

私にとって、大切な価値観は大きく三つある。「自身が喜びや楽しみを感じること」、「多様性や独自性があること」、そして「それらの価値観に従って自らが決定すること」である。かみ砕いて言うと、「楽しいこと、人と違うことをやりたい。それを自分で決めたい」ということだ。

キャリアの分岐点では、この価値観に従って選択してきた。最初の選択では、「このまま獣医師になっても、ギャップを抱えながらでは心の底から喜びを感じることはできないだろう」、「獣医学科に入ったからといって、全員が同じルートに行く必要はないのでは」、「私自身がどうしたいかという気持ちに素直になって、自分で決めなくては」ということを考えた。

この「大切な価値観」は少し視点を変えると、モチベーションの話に繋がる。何がモチベーションになるのか、どういう時にモチベーションが高かったか、あるいは低かったか、ということのを思い返してみると、自身の価値観が見えてくるかもしれない。もしこれを読んでいる皆さまの中で、何か迷いがある、岐路に立っている、なんとなくモチベーションが上がらない、とい

う方がいるのであれば、是非、考えてみてほしい。人生における大切な価値観は何か。あなたをモチベートするものは何か。譲れないものは何か。キャリアにおける軸は何か。一貫した軸があるか。その軸から外れていないか。

思い描いたそのキャリアをどのように作っていくのか、という話は長くなりそうなので置いておくことにして、これでパソコンを閉じることにする。ほんの一部でも、参考になるところがあればよいと願う。

## LLM時代を生きる中で感じること

株式会社Nuco  
石井 和行(松江北2010年卒)

### はじめに

皆さま、大変ご無沙汰しております。祈月書院OBの石井と申します。大学卒業後、祈月書院研修会等に参加する機会も無かった為、簡単に自己紹介から始めさせていただきます。

2011年4月に東京大学文科二類に入学し、その際に島根から上京しました。その後は進学振分けで経済学部経済学科へと進学し、学部時代の4年間は奨学生としてお世話になりました。大学卒業後は株式会社商工組合中央金庫という政府系金融機関で4年間法人営業をしていましたが、業界の将来に不安を感じ、日々悶々としている中、今の職場（株式会社Nuco）で代表を務める大学時代の先輩に声をかけていただき、AIシステム開発といった全く別ベクトルの業務を行う会社に転職しました。

当時は転職に対して不安や葛藤もあったのですが、将来有望な業界だと感じたことと、代表の熱意に後押しされ、新たな一步を踏み出すことにしました。もちろん、入社してからはとにかくコードを書いてプログラミングに慣れる他、本を読んで知識を身につける必要があったため、初めの方はなんとか慣れるのに精一杯でしたが、幸い勉強すること自体は学生時代から苦ではなく、新たな学びがあることに刺激を感じていました。変化の早い業界ですし、その中で会社も成長し、変化していくので、自分も置いていかれないようにと食らいついているうちあっという間に5年半が経過し、現在に至ります。

### 現在の仕事について

株式会社Nucoという会社でSE（システムエンジニア）として開発業務に携わっております。受託開発という形態を取っており、クライアントワークがメインです。

社内では数多くの開発プロジェクトが存在し、レコメンドエンジンやチャットボットの開発においては、1年ほど前から突如話題となったChatGPTをはじめとするLLM（Large Language Model）を組み込んだシステムの受託開発がかなり増えてきている印象です。レコメンドエンジンという言葉に馴染みがない方もいらっしゃるかもしれませんが、ざっくり言えばYahoo!などのニュース記事を読むと「あなたにおすすめの記事はこちら」といった推薦が出てくる、あの裏側のロジックや処理を作成する仕事です。

レコメンドエンジンの開発においては機械学習（いわゆるAI）を用いるので、「自分は文系だからできない」と思い込んでいたのですが、そんなことはありません。統計や線形代数などの知識が求められることもあるのですが、現実に即している分、大学で学んだ時よりも遥かにとっつきやすかったですし、処理の中で使うだけなら比較的すぐできるようになります。（もちろん理論を根本から理解するのはかなり骨が折れますが、実務上そこまで求められることはほとんどありません。）英語のドキュメント（マニュアルのようなもの）を読みながら進めることもあるので、むしろ数学より英語の方が重要かもしれません。

LLMを使ったチャットボットの開発では、RAG（Retrieval-Augmented Generation：検索拡張生成）を使うことで、一般的にLLMが知らない独自の情報も加味してLLMに出力させたり、またLLMマルチエージェントと呼ばれる、複数のLLMが連携して複雑なタスクを処理させたりすることで、出力精度を向上させたり、各ドメインに特化したやり取りができるようになります。他にも、「プロンプトエンジニアリング」と呼ばれる、LLMに役割を与えたり前提条件の指示の仕方を変えたりすることで出力の精度を上げるといった細かなチューニングが行われたりします。

### 最近思うこと

そのような時流の中、SEとしての役割も変わってきているように思います。特に対人コミュニケーションの重要性が強まっていると改めて感じています。簡単なコーディングなどはLLMに任せることができるようからです。コミュニケーションが重要というと営業で顕著に思われますが、SEでもクライアントとの打ち合わせは頻繁にあり、先方が何を求めているかを正確に把握しておかないと、ズレた対応をしてしまったり、予算や納期の制約を守れなかったりすることもあります。正確な意思疎通ができた上で、やっとコーディングなどの具体的な作業に入ることができます。

よく「将来AIに仕事を奪われる職業」などが取り沙汰されますが、これは特定の職業に限った話ではなく、いろいろな職業に言えることで、人間はそれを使いこなしてプラスアルファの価値を生むことが求められていると考えています。

また、上記でコーディングはLLMに任せればいいと書きましたが、それを使う人間のコーディング力がなくていいというわけではありません。LLMは往々にしてハルシネーション（端的に言うと自信満々で嘘をつくこと）を引き起こします。ですので、LLMの出力を鵜呑みにしてはならず、使う側がその出力の品質を担保しなければなりません。

出力結果を見て品質を担保するには、LLMを使う人間側にもある程度の知識が必要になります。

### LLMを賢く使う

ChatGPTの登場以降、テキストに限らず生成AIはかなり普及したように思いますが、使う上での注意点が何点かあります。

一点目としては先程述べた通り、ハルシネーションを念頭に置くこと（LLMの出力を鵜呑みにしないこと）です。大学のレポートや、企業における企画書などの叩き台としてLLMを活用することもあると思いますが、情報の正確性には注意が必要です。

二点目ですが、プライバシー情報や機密情報を入れないようにすることです。LLMは入力された情報をトレーニングデータとして利用することがあるため、プライバシーやデータセキュリティの観点から、最悪流出しても問題ない情報のみを入力するようにしましょう。

三点目は、依存しすぎないようにすることです。生成AIをあてにしていると考える力が衰えていきますし、時折障害が発生して使えなくなることがあるので、いざという時でも自分自身のスキルや知識を使い、乗り切ることが大事です。

他にも使いこなす上で細かく言えば、求める出力に応じて使うサービスを変えるとか、技術進歩に対するキャッチアップを怠らないなど様々ありますが、上記三点に注意していれば特段問題ないと思います。しっかり自分の頭で考えて活用する癖をつけておくことが大事です。

### 終わりに

LLMと関わる今の仕事の中で個人的に思うことを書き連ねてきましたが、皆さんにとって少しでも参考になれば幸いです。また、弊社では学生インターンの募集も行っていますので、もし興味を持たれた方がいらっしゃったらご連絡いただけると幸いです。

## 令和5(2023)年度祈月書院秋期研修会報告

### 「コミュニケーションの変遷」

片岡 柁人、雲下 晃

#### 【はじめに】

2023年度秋季研修会は、10月21日、22日に対面（湘南国際村センター）およびZoomのハイブリッド形式で開催された。今回の研修会は「コミュニケーションの変遷」をテーマとした。数年間にわたるコロナ禍において私たちのコミュニケーションの様式は大きな変化を余儀なくされたが、現在ではそれが徐々にもとに戻されようとしている。コミュニケーション様式の再構築が求められている今、私たちの社会におけるコミュニケーションとはどういうもので、どうあるべきかを議論するため、「今後のコミュニケーションの形」、「生物学的にみたコミュニケーション」の観点から幹事2名が発表し、質疑応答および討論を行った。

#### 【奥原先生の講義】

コミュニケーションを何のために行うのかというテーマのもと、東京大学大学院医学研究科で医療コミュニケーション学分野に携わる奥原剛先生に講演をしていただいた。講演は「私」に着目し、さまざまな角度から「私」とは何なのかを考え、そしてコミュニケーションをなぜ「私」が行うのかを考えるというものであった。

まず、「私」の視点ということで、トリックアートのような画像から私たちの見ているものがどの程度正しいものなのかを考えた。そこから、知覚というのは過去の記憶から創造されたものであり、その記憶は実際からは書き換えられた私の偏った物語であるという考えに私は驚いた。そして、このような視点を持つ私たちには限界があるということにも納得した。

では、視点を動かしてみるとどうなるかということで、てんとう虫を例に当事者の視点に立つことの重要性を私は知った。ここで、「私」というものは何かを考える。都築益世の「てんとうむし」と用いて、てんとう虫についてイメージしてみる。すると、脳では小さくて赤い虫を思い浮かべるが、てんとう虫の当事者に立つ

と、一本の草という橋から青空に飛び立つものとしても考えられる。当事者視点に立とうとすると多くの混乱を「私」は感じてしまう。したがって、脳が「私」であった場合、多くの矛盾や葛藤を抱えることとなり脳よりも外部に「私」というものは定義されるのではないかという考えに至る。このときの「私」とは他者の存在によって大きく変化するものであり、集団の中での意思決定であったり、社会的学習を行い自分の言動を見直したりすることから、「私」と「私以外の人」との関わり合いのなかで生まれるものが「私」という結論に至った。

ここで、「私」の存在価値に焦点を当てると、フィクションを創造し、一貫性や統一性も希薄であり、他者との関係の中で立ち現れるものであるからこそ、他との優劣はつけることができず、差異があることに結論づけられると考えられる。つまり、「私」の存在価値は「私」自体が持っているのではなく、「私」と「私以外の他者」との差異が持っているということになる。そして、この差異はコミュニケーションによって顕現されると考えることができる。



したがって、私たちはコミュニケーションを行う上で、年齢や立場などのさまざまな違いが価値として生まれていることに気づき、意識する必要があると考えられる。

ここで最初の疑問に立ち返ると、コミュニケーションは私自身と相手となる他者との違いを価値として理解するために行われると考えることができる。したがって、私たちは自分たちの固定化された視点を一度解き放ち、他者の視点を受け入れ、違いを大切にし、そこに価値を生み出すような姿勢や考えを持つことが大切であると言える。

時代が変化していく中でさまざまな違いが浸透し、認められていくようになった現在だからこそ、今一度何気なく行っているコミュニケーションの意味を考えるべきではないかと考える。

今回の講義では、「私」の価値に視点を持っていき、コミュニケーションが行われる意義について考えた。そして、急速に情報社会へと変化していく世の中でこのようなコミュニケーションから生まれる価値を大切にしていきたいと考えた。

#### 【今後のコミュニケーションの形】

雲下 晃

私は、今後のコミュニケーションということに焦点を当て、主にコミュニケーションツール

がどのように変化していくのかについて考えた。

まず、奥原先生の話からコミュニケーションはお互いの違いを価値として顕現されるものと定義づけされていたが、そのコミュニケーションがAIやVRといった先端情報技術に揉まれた時、より一層コミュニケーションの必要性は高まるのではないかと考える。

これまでのAIはコミュニケーションツールとしての機能は乏しく、情報提供を行うデータベースのような役割しか持っていない。しかし、AIは現在、急速に世の中に普及し始め、対話型AIといった人の言葉をプロンプトから読み取り、臨機応変に対応するようになっている。他のAIもおそらく人の考え方に近づいていくような進化を遂げると考えられ、精度も今以上に高くなることは容易に推測できる。

このとき、AIとの対話はコミュニケーションと言えるのかを考えてみた時、私はコミュニケーションの一つであると考え。なぜなら、自分の考えをAIに伝え、AIはその考えを理解した上で賛成または反対、もしくは全く別の意見を述べてくる。この機能が現在は精度が低く、安易に信頼することは厳しいが、将来的にみると人と人が対話するときと同じように、またはそれ以上にコミュニケーションを実現できるのではないかと考える。

一方で、AIは人よりも計算速度が速いこと



や、データベースとしての機能が強いことから、現在は商業的利用が多いが、通訳や翻訳といったコミュニケーションを行う場にもより普及していくと推測できる。

このように、AIと私たちのコミュニケーションは今後一層切っても切り離せない関係となっていくのではないかと考えられる。

他にも、VRをはじめとしたXRなどの技術が発達し始めている。この技術は私たちのコミュニケーションの場を広げ、機会を増やす起爆剤になると考えられる。これまではオフラインでのコミュニケーションをよく行っていたが、コロナの影響もありオンラインでのコミュニケーション機会は増えてきている。

しかし、オンラインでの対話に不便さを感じる人は多いと考える。その原因としては、ネットワークの環境に左右されたりタイムラグが生じたりといった機械的なもの以外にも、相手の表情や声のトーンが読み取りづらい、ジェスチャーなどの動きを伝えづらいといったものが挙げられるだろう。

その中で、XRの技術はオンラインを中心としつつも、機能的には現実を再現する、もしくは現実にさらなる機能や価値を追加することが可能である。こういった大きな変化をもたらす利点も多いことから、XRは遠くない将来に世の中に普及していくと考える。

これらの技術を今後私たちが正しく扱うためには、正しい知識を得て理解すること、そして積極的に利用していくことが大切だと考える。コミュニケーションと情報技術はこれからより深い関わりを持っていくからこそ、私たちはどちらに対しても正しい理解を持ち、自らの意思で行動していくことが必要であると私は考える。

## 【コミュニケーションの本質を生物学的に考える】

片岡 柊人

私の発表ではコミュニケーションという全体のテーマに対して最も根幹となる部分に立ち戻り、コミュニケーションとは何かを議論することを目的とした。ヒトは言語や表情・ボディーランゲージ等でコミュニケーションをとる。一方で、ヒト以外の様々な生物もそれぞれの手段でコミュニケーションを取っている。その手段は非常に多様であり、中にはヒトとは全く異なるコミュニケーション手段も存在する。私たちがそのような行動も「コミュニケーション」と呼んでいる背景には、私たちの中に潜在する普遍的で本質的なコミュニケーションの定義のようなものがあると考えた。そこで私の発表では、様々な生物のコミュニケーションを分析することによって、私たちにとってのコミュニケーションがどういうものを明らかにすることを試みた。



発表ではまず、一般的にコミュニケーションと呼ばれている様々な生物の活動を紹介した。何らかの情報を化学物質の分泌によって他者と共有する化学コミュニケーション、求愛ダンスや表情に代表される視覚的コミュニケーション、鳴き声を介した聴覚的コミュニケーションが代表的である。これらの現象を一般化すると、まず伝達されるものが存在し、発信者がそれを何らかの媒体に載せて受信者に届け、それを受け取った受信者の行動変容が起こるという流れが見いだされる。

次に、二者間の相互作用ではあるがコミュニケーションとは呼ばれない、あるいは呼ばれることが少ない現象を3つ分析し、コミュニケーションとの比較を行った。一つ目に細菌が毒性を持つ物質を分泌することで他の細菌を殺す現象を紹介した。ここで特筆すべきは受信者の機能が発信者の発した媒介物質によって破壊されている点であり、受信者側の正常な機能発現の結果として受容と行動変容が起こっているという事は、コミュニケーションのひとつの要件であろう。それは即ち、情報を得る目的や理由が受信者に内在していることを示唆している。2つ目の例として、アリがアブラムシから蜜をもらう代わりにアブラムシを保護するという相利共生を紹介した。このやり取りのバックグラウンドでは、アブラムシが発するフェロモンによってアリがアブラムシの存在を認識するという化学コミュニケーションが行われている。このフェロモンはアブラムシの存在という情報の記号として働いているが、それに対して蜜や保護はそれ自体が利用可能なものであり、何か他の情報を記号化している訳ではない。したがって、「記号化」がコミュニケーションのもう一つの要件であろう。最後に、イトヨのオスの攻撃行動の誘発機構を紹介した。イトヨのオスは繁殖期になると腹面が赤色を呈するが、他のオスはこの赤色を認識して攻撃することが知られている。この赤色の本来の機能が何であるかについては会場では意見が分かれたが、少なくとも攻撃を受けるようなシグナルを発信すべき理由は発信者側には無く、この点がコミュニケーションと呼ばれることが少ない原因ではないかと考えている。

今回の考察をまとめると、私たちがコミュニケーションと呼んでいるのは、発信者が受信者に伝えたい情報を特定の媒体で記号化して発信し、受信者がそれを受け取って行動変容するという現象であり、発信者と受信者がそれぞれにコミュニケーションをとるべき目的や理由を持った上で実現される相互に主体的な行為であるという結論に至った。

最後に、テレビ通話は視覚的情報と聴覚的情報が揃っているにも関わらずFace to Faceコミュニケーションに対して物足りない感覚を持つことが多いという問題から、テレビ通話で伝達できていない無自覚のコミュニケーション要素は何か、という問いで全体討論を行った。普段自覚していないものを見つけるという要求は少し難易度が高いかと思われたが、身体の向きや音の方向などの空間認識、温度やにおいといったテレビ通話にない要素の他、タイムラグなどの知覚できない微小な差異が感覚の違いを生んでいるのではないかといった意見があった。その他にも多様な意見が出され、私たちのコミュニケーションがどのような要素で構成されているのかという問題について非常に活発な議論が行われた。

### 【おわりに】

本研修会では、これまでのコミュニケーションの変遷を振り返り、これからのコミュニケーションがどうあるべきか多角的な視点での議論を行った。今回は新たな試みとして、従来は全体で一名ずつ発言する方式だった全体討論を、数名ずつの小グループに分けてそれぞれ自由に討論するという方式を採用した。従来と比べて討論が活気を帯びただけでなく、同時に多くのアイデアを集めることができるという点で非常にメリットが大きかったと感じた。

私たち人類は、文字、印刷、電話、映像など、自らのコミュニケーション手段を拡張するために様々なものを開発し、その度に人間社会の有り様は変化してきた。そして、コミュニケーション手段を拡張しようとする試みは今もなお続いている。そしてその挑戦は歴史と同じように社会を変えていくだろう。

反対に、社会の変容によってコミュニケーシ

ョンの変容が強いられたのがコロナ禍であった。数年間にわたって続いてきたコロナ禍によって、私たちは最も基本的なコミュニケーションである対面のコミュニケーションの大部分を失った。テレビ電話などのテクノロジーによって拡張されたコミュニケーションに頼り、対面でのコミュニケーションはマスクによって表情という視覚的コミュニケーションが失われた。そのようなコミュニケーションでは、どこかやりづらさや物足りなさを感じたり、相手と摩擦が生じたりした場面は少なくなっただろう。このことは、失われた基本的なコミュニケーション手段の重要性を私たちに痛感させたと同時に、これまで自分たちのコミュニケーションの本質についていかに無自覚であったかを示しているだろう。一方で、失われたものを補完すべく開発・普及されたバーチャルコミュニケーションの有用性が広く認知されたことも事実であり、自分たちの力でコミュニケーション手段を拡張する

挑戦の価値も教えてくれた。

コロナ禍が徐々に終わろうとしている今、社会は以前のコミュニケーション手段を取り戻し、そこにコロナ禍で有用性を知ったバーチャルコミュニケーションを加えて再構築しようとしている。壊れた物を再構築するとき、壊れる前のすがたや失われたものを正確に把握しなければならない。つまり、今こそ私たちは、私たちのコミュニケーションがどういうものであったのか、何が私たちや社会にとって重要だったのか、正確に把握しなければならない。これからはコミュニケーションで社会を大きく変えるチャンスである。コミュニケーションをどう変え、どのような社会に変えていくのか、私たちは考えなければならない。

最後に、打ち合わせから当日の発表まで、手厚いサポートを頂いた役員の方々、また当日の議論に参加して下さった皆様に心から感謝申し上げます。



## 編集後記

長く続いたこの夏の猛暑も、9月も終わりになってやっと終わろうとしています。時に体温をも超える暑さだけでなく、毎日のようにどこかで時間数十ミリという強い雨が降り、日本列島に接近する台風は迷走し、線状降水帯による豪雨災害も発生した2024年の日本の夏。これが地球温暖化なのかと改めて思いつつ、この冬は冬で、地球を巡る大気の気まぐれにより私たちがまだ知らないどんな事象が生じるのか、不安を禁じえません。

さて、ここに祈月書院報第41号をお届けします。

巻頭には6月の春季研修会で、参加者の生け花体験付きの講演をいただいた草月流1級師範の松本紅女さんと秋田紅奈さんによる、生け花の歴史と本質に触れた「いけばなのすすめ」、巻末にはコロナ禍が収まって久しぶりに一泊で実施された昨年の研修会幹事の奨学生、片岡柁人さんと雲下晃さんによる「令和5（2023）年度祈月書院秋期研修会報告」を配しました。

そしてその間には、いま様々な分野で活躍している奨学生OB・OGが、それぞれの仕事や生活の中で考えたことや気がついたことを記した9編を配しました。

全体を通じて何か統一的な特集テーマがあるわけではありませんが、奨学育英団体として60年（※1964年の育英事業の再開より。）の歴史をもつ祈月書院がどういう集団であるか、外部の方はもちろん、現役の奨学生やOB・OG諸氏も含めて改めて理解していただく一助になれば幸いです。

（第41号編集委員 長崎 卓）



宍道湖と夕日



松江 水郷祭

2024年度（公財）祈月書院役員

理事

足立潔、小川大輔、小田亜紀子、熊野嘉郎、福井千尋、古津弘也、吉原泰子

監事

西田敦成、関口依里、

評議員

安部素嗣、内田誠治、許斐理恵、柴田直哉、新宮智子、数藤由美子、高尾康太、  
高橋美樹、長崎卓、南目梨江、火原彰秀、宮廻裕樹、八巻知香子、吉清恵介、  
渡部文夫

祈月書院報第41号編集担当役員

足立潔、熊野嘉郎、長崎卓、吉原泰子

祈月書院研修会担当役員

小田亜紀子、小川大輔、許斐理恵、西田敦成、火原彰秀、福井千尋、宮廻裕樹、  
八巻知香子

ご意見、ご感想をkigetsu\_shoin@gmail.comまでお寄せ下さい。